大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第50集

伊藤田窯跡群発掘調査報告書
〈コンゲ窯跡・穂屋１号窯跡・穂屋２号窯跡〉

－国道212号（中津三光道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010

大分県教育庁埋蔵文化財センター

コンゲ窯跡調査地区空撮（南方向から）

序　　文

本書は、大分県教育委員会が、県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した国道212号（中津三光道路）道路改良工事に伴う伊藤田窯跡群の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する中津市伊藤田は、中津市南部に位置しており、この地区に展開する丘陵には古墳時代から歴史時代の多くの窯跡が分布し、東九州有数の古代窯業地の一つとして知られています。

伊藤田窯跡群の調査では、コンゲ窯跡、穂屋１・２号窯跡の３基の内容を知ることができました。発掘調査の結果、穂屋窯跡では７世紀前半～７世紀後半、コンゲ窯跡では８世紀前半頃の須恵器製作の実態を明らかにし、古代の須恵器生産を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成22年３月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長　佐藤英一

例　　言

1　本報告書は、大分県教育委員会が平成20年度に実施した、国道212号（中津三光道路）道路改良工事に伴う伊藤田窯跡群（コンゲ窯跡・穂屋１号窯跡・穂屋２号窯跡）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。

3　遺物や記録類の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下、センターという。）で実施した。

4　出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。

5　本書で使用した地形図（１／25,000）は国土地理院作成のものを利用した。

6　本書の執筆・編集は、センター一般事業班担当 友岡信彦・小林昭彦が担当した。
　また、第4章理化学的分析については、株式会社パレオ・ラボが行なった。

7　本書の作成にあたり、中津市教育委員会　花崎徹・浦井直幸氏、大分市教育委員会　池邊千太郎氏には資料提供等の御協力を得た。

目　　次

序文
例言

第１章　調査の経過
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　発掘作業の経過 …… 1
第３節　整理作業等の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の方法と成果
第１節　調査の方法 …… 6
第２節　コンゲ窯跡 …… 6
第３節　穂屋１号窯跡 …… 17
第４節　穂屋２号窯跡 …… 51

第４章　理化学的分析
熱残留磁気測定 …… 57

第５章　総括
第１節　窯跡の構造 …… 65
第２節　出土須恵器の器種と時期 …… 68
第３節　須恵器のヘラ記号 …… 70

挿 図 目 次

第 1 図　周辺遺跡分布図 …… 4
第 2 図　伊藤田窯跡群調査窯跡位置図 …… 5
第 3 図　コンゲ窯跡及び周辺地形実測図 …… 9
第 4 図　コンゲ窯跡実測図（1）…… 10
第 5 図　コンゲ窯跡実測図（2）…… 11
第 6 図　コンゲ窯跡・灰原実測図 …… 12
第 7 図　コンゲ窯跡周辺土杭 1 ～ 3 実測図 …… 13
第 8 図　コンゲ窯跡出土遺物実測図（1）…… 14
第 9 図　コンゲ窯跡出土遺物実測図（2）…… 15
第10図　コンゲ窯跡出土遺物実測図（3）…… 16
第11図　穂屋 1 号窯跡及び周辺遺構配置図 …… 17
第12図　穂屋遺跡出土溝実測図 …… 18
第13図　穂屋 1 号窯跡実測図 …… 21
第14図　穂屋 1 号窯跡灰原土層図 …… 22
第15図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（1）…… 29
第16図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（2）…… 30
第17図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（3）…… 31
第18図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（4）…… 32
第19図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（5）…… 33
第20図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（6）…… 34
第21図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（7）…… 35
第22図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（8）…… 36
第23図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（9）…… 37
第24図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（10）…… 38
第25図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（11）…… 39
第26図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（12）…… 40
第27図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（13）…… 41
第28図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（14）…… 42
第29図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（15）…… 43
第30図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（16）…… 44
第31図　穂屋 1 号窯跡出土遺物実測図（17）…… 45
第32図　穂屋 1 号窯跡周辺部出土遺物実測図（1）…… 46
第33図　穂屋 1 号窯跡周辺部出土遺物実測図（2）…… 47
第34図　穂屋 2 号窯跡実測図（1）…… 51
第35図　穂屋 2 号窯跡実測図（2）…… 52
第36図　穂屋 2 号窯跡出土遺物実測図（1）…… 53
第37図　穂屋 2 号窯跡出土遺物実測図（2）…… 54
第38図　穂屋 2 号窯跡出土遺物実測図（3）…… 55
第39図　穂屋 2 号窯跡出土遺物実測図（4）…… 56
第40図　広岡（1977）による地磁気永年変化曲線（一部）と窯跡焼土の残留磁化方向 …… 60
第41図　年代測定を行った試料 …… 63
第42図　ウィグムマッチング図および暦年較正図 …… 64
第43図　県内の須恵器窯跡概略図 …… 67
第44図　穂屋 1 号窯跡ヘラ記号分類 …… 72

表 目 次

表 1 窯跡床面焼土の残留磁化測定結果（偏角補正前）……59
表 2 各窯跡の焼成年代推定値……60
表 3 測定試料及び処理（1）……61
表 4 測定試料及び処理（2）……61
表 5 コンゲ窯跡出土炭化材の暦年較正およびウィグルマッチングの結果……62
表 6 コンゲ窯跡出土炭化材および穂屋2号窯跡出土スサ材の放射性炭素年代測定、暦年較正……62

遺物観察表

表 7 コンゲ窯跡遺物観察表（1）……75
表 8 コンゲ窯跡遺物観察表（2）……76
表 9 コンゲ窯跡遺物観察表（3）……77
表 10 コンゲ窯跡遺物観察表（4）……78
表 11 穂屋1号窯跡遺物観察表（1）……79
表 12 穂屋1号窯跡遺物観察表（2）……80
表 13 穂屋1号窯跡遺物観察表（3）……81
表 14 穂屋1号窯跡遺物観察表（4）……82
表 15 穂屋1号窯跡遺物観察表（5）……83
表 16 穂屋1号窯跡遺物観察表（6）……84
表 17 穂屋1号窯跡遺物観察表（7）……85
表 18 穂屋1号窯跡遺物観察表（8）……86
表 19 穂屋1号窯跡遺物観察表（9）……87
表 20 穂屋1号窯跡遺物観察表（10）……88
表 21 穂屋1号窯跡遺物観察表（11）……89
表 22 穂屋1号窯跡遺物観察表（12）……90
表 23 穂屋1号窯跡遺物観察表（13）……91
表 24 穂屋1号窯跡遺物観察表（14）……92
表 25 穂屋1号窯跡遺物観察表（15）……93
表 26 穂屋1号窯跡遺物観察表（16）……94
表 27 穂屋1号窯跡遺物観察表（17）……95
表 28 穂屋1号窯跡遺物観察表（18）……96
表 29 穂屋2号窯跡遺物観察表（1）……97
表 30 穂屋2号窯跡遺物観察表（2）……98
表 31 穂屋2号窯跡遺物観察表（3）……99
表 32 穂屋2号窯跡遺物観察表（4）……100

写真図版目次

図版1 コンゲ窯跡 空撮
図版2 コンゲ窯跡 全景
図版3 コンゲ窯跡 焼成部－5・6区－遺物出土状態
図版4 コンゲ窯跡 焼成部－5・6区－遺物出土状態 焚口付近－7・8区－遺物出土状態
図版5 コンゲ窯跡 断割状態全景 直交方向断割断面（D－D'）
図版6 穂屋1号窯跡 空撮 窯跡・灰原
図版7 穂屋1号窯跡 窯内遺物出土状態 灰原D－7遺物出土状態
図版8 穂屋1号窯跡 灰原C－5遺物出土状態 灰原D－6遺物出土状態
図版9 穂屋1号窯跡 窯跡主軸方向土層断面－西側－ 窯跡主軸方向土層断面－東側－
図版10 穂屋1号窯跡 直交方向断割断面（B－B'）－北半部－・直交方向断割断面－全景－
図版11 穂屋2号窯跡 遠景 全景
図版12 穂屋2号窯跡 窯内遺物出土状態 完掘時窯跡全景
図版13 穂屋2号窯跡 焼成部－5・6区－遺物出土状態 焼成部～燃焼部－5～8区－遺物出土状態

図版14　穂屋２号窯跡　焼成部～燃焼部－５・６区－遺物出土状態　焼成部～燃焼部－７・８区－遺物出土状態
図版15　穂屋２号窯跡　断割状態全景　窯跡主軸方向断割断面
図版16　穂屋２号窯跡　直交方向断割断面（D－D'）－南半部－・・－北半部－
図版17　コンゲ窯跡　出土遺物（1）
図版18　コンゲ窯跡　出土遺物（2）
図版19　コンゲ窯跡　出土遺物（3）
図版20　コンゲ窯跡　出土遺物（4）
図版21　コンゲ窯跡　出土遺物（5）
図版22　コンゲ窯跡　出土遺物（6）
図版23　コンゲ窯跡　出土遺物（7）
図版24　コンゲ窯跡　出土遺物（8）
図版25　穂屋１号窯跡　出土遺物（1）
図版26　穂屋１号窯跡　出土遺物（2）
図版27　穂屋１号窯跡　出土遺物（3）
図版28　穂屋１号窯跡　出土遺物（4）
図版29　穂屋１号窯跡　出土遺物（5）
図版30　穂屋１号窯跡　出土遺物（6）
図版31　穂屋１号窯跡　出土遺物（7）
図版32　穂屋１号窯跡　出土遺物（8）
図版33　穂屋１号窯跡　出土遺物（9）
図版34　穂屋１号窯跡　出土遺物（10）
図版35　穂屋１号窯跡　出土遺物（11）
図版36　穂屋１号窯跡　出土遺物（12）
図版37　穂屋１号窯跡　出土遺物（13）
図版38　穂屋１号窯跡　出土遺物（14）
図版39　穂屋１号窯跡　出土遺物（15）
図版40　穂屋１号窯跡　出土遺物（16）
図版41　穂屋１号窯跡　出土遺物（17）
図版42　穂屋１号窯跡　出土遺物（18）
図版43　穂屋１号窯跡　出土遺物（19）
図版44　穂屋１号窯跡　出土遺物（20）
図版45　穂屋１号窯跡　出土遺物（21）
図版46　穂屋１号窯跡　出土遺物（22）
図版47　穂屋１号窯跡　出土遺物（23）
図版48　穂屋１号窯跡　出土遺物（24）
図版49　穂屋１号窯跡　出土遺物（25）
図版50　穂屋１号窯跡　出土遺物（26）
図版51　穂屋１号窯跡　出土遺物（27）
図版52　穂屋１号窯跡　出土遺物（28）
図版53　穂屋１号窯跡　出土遺物（29）
図版54　穂屋２号窯跡　出土遺物（1）
図版55　穂屋２号窯跡　出土遺物（2）
図版56　穂屋２号窯跡　出土遺物（3）
図版57　穂屋２号窯跡　出土遺物（4）
図版58　穂屋２号窯跡　出土遺物（5）
図版59　穂屋２号窯跡　出土遺物（6）
図版60　穂屋２号窯跡　出土遺物（7）
図版61　穂屋１号窯跡　ヘラ記号（1）
図版62　穂屋１号窯跡　ヘラ記号（2）
図版63　穂屋１号窯跡　ヘラ記号（3）
図版64　穂屋１号窯跡　ヘラ記号（4）
図版65　穂屋１号窯跡　ヘラ記号（5）
図版66　穂屋１号窯跡　ヘラ記号（6）

第１章　調査の経過

第１節　調査の経緯

調査の起因

調査の起因となった中津三光道路は、中津日田道路の一部区間を構成し、国道10号から東九州自動車道に至る2.92kmの道路である。全線区間となる中津日田道路は、大分県北・日田地方拠点都市地域内の中心都市である中津市と日田市を結ぶ地域高規格道路であり、九州自動車道・大分自動車道や東九州自動車道と連結し、福岡市、北九州市などとの循環型ネットワークを形成する道路として計画され県の重点事業と位置づけられている。このため、当該区間を構成する中津港線、中津道路などと同様に区間内に所在する遺跡の取扱いについては遺跡保存と事業の推進両面の調整を図りながら対応に努めてきた。特に中津三光道路のルートにあたる市街地南部の丘陵には大分県最大の古代窯跡群・伊藤田窯跡群が広がるため、遺跡の調査方法や保存に注意を払った。

〔コンゲ窯跡〕

平成20年２月、土木建築部建設政策課から調査依頼を受けた。

確認調査は、平成20年３月に実施した。調査は対象地3000㎡に幅２ｍ、長さ20ｍ～50ｍのトレンチ20本を設定し、遺構の有無を確認した。

確認調査の結果、窯体の一部を確認したため、本調査が必要となった。

本調査は、窯跡、灰原などを対象に平成20年７月17日～８月29日の間実施した。

〔穂屋１号窯跡〕

平成15年度に土木建築部建設政策課から当該年度に穂屋遺跡の調査実施範囲と時期を協議し、調査依頼を受けた。

平成15年９月、穂屋遺跡（穂屋1号窯跡を含む）の確認調査を実施した。調査は対象地7,000㎡にトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。

確認調査の結果、溝、窯の灰原などを確認したため、本調査が必要となった。

本調査は、平成16年10月に実施した。この調査で窯体の一部を確認した。

窯跡範囲については、用地買収が完了した平成20年９月に確認調査の依頼を受け、調査を実施した。

本調査は、平成20年12月４日～平成21年１月16日の間実施した。

〔穂屋２号窯跡〕

平成20年９月、確認調査依頼を受け、平成21年10月に、調査を実施した。調査は対象地に幅２ｍ、長さ20～30ｍのトレンチ21本を設定し、遺構の有無を確認した。

確認調査の結果、斜面の断面に窯体を確認したため、本調査が必要となった。年度末ではあったが、道路工事の工程進捗状況等による中津土木事務所の強い要請があり、本調査は、平成21年１月28日～３月５日の間、窯跡と灰原を対象として実施した。

第２節　発掘作業の経過

発掘調査は、埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）が調査主体となって実施した。重機や労務管理など支援業務については、民間へ一括委託する体制をとった。委託内容は、①重機による表土除去、②人力による遺構検出、③人力による遺構掘削、④遺構実測、⑤遺構写真、⑥空撮、現場管理などであった。一方、センターでは担当者が調査区の設定、遺構面の確認、遺構の平面形、規模・配置・相互関係の確認、埋土の分層を行い、遺物出土状態、付属施設を確認するなど個別遺構の性格、また遺跡全体の把握を行ったうえで、受注業者の調査技師に作業段階に応じた指示等を行うなど調査精度を確保する体制で臨んだ。

第３節　整理作業等の経過

整理作業は、基本作業と資料作成業務を一括して委託し、作業場所をセンターとして実施した。具体的な内容は、①遺物水洗、②遺物注記、③遺物接合、④遺物復元の4工程を前半工程とし、⑤遺物実測、⑥遺物拓本、⑦遺物観察基礎データ作成、⑧遺物実測図トレース、⑨遺構図トレースの４工程を後半工程とした。諸作業として、遺物取出し、遺物区分け・整理、遺物収納、整理作業施設の清掃等の４作業を加えて整理作業を委託した。

報告書作成作業のうち、遺物図版・遺構図版の作成、遺物写真撮影、遺物及遺構写真図版の作成、原稿執筆、編集作業については担当職員が行った。

整理作業の経過

〔コンゲ窯跡〕

出土遺物の量は、18箱あった。

平成21年６月１日から平成21年７月31日に遺物水洗から遺物実測図トレースを実施した。

〔徳屋1号窯跡〕

出土遺物の量は、120箱あった。

平成21年６月１日から平成21年９月30日に遺物水洗から遺物実測図トレースを実施した。

〔徳屋2号窯跡〕

出土遺物の量は、41箱あった。

平成21年６月１日から平成21年８月31日に遺物水洗から遺物実測図トレースを実施し終了した。

遺物写真撮影は、平成22年１月に行った。

原稿執筆は6月から開始し、遺物整理作業の進捗に応じて随時進め、11月に終了した。

入稿は平成22年1月に行い、初稿を平成22年２月に受け取り、随時校正を行った。３校を２月に終え、校了とした。

調査時の調査組織は以下のとおりである。

（調査の組織）

調査担当者

総括	坂本嘉弘　大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼調査第一課長	
調査員	小林昭彦	調査第一課　主幹
	友岡信彦	調査第一課　副主幹
調査事務	宮永敬三	総務課長
	久寿米木百合子	総務課　副主幹
	徳藤仁志	総務課　主査

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡の所在する中津市は、大分県北部に位置し、西北を山国川を挟んで福岡県と接する。北部は周防灘に面し、海岸部から神代平野など豊かな可耕地が展開し、市街地を越え、南の丘陵部に至る。丘陵は、八面山など500m級の急峻な形成が見られる一方、海岸部へ向かい樹枝状の低位丘陵が展開しており通称下毛原丘陵と呼ばれている。下毛原丘陵は北方向に大きく開析された谷が3本みられる。これらの谷にはさらに東西に派生する支谷が多数ある。谷を望む斜面は概ね緩やかな傾斜をもつ。今回調査を実施したコンゲ窯跡、穂屋１号・２号窯跡を含む伊藤田窯跡群はこの谷部に形成されている。

第2節　歴史的環境

伊藤田窯跡群は森山地区から伊藤田地区、野依地区、一部宇佐市木部に及ぶ東西約４㎞の範囲に分布し、丘陵先端や中腹の斜面に形成されている。この地域の窯跡については、古くからよく知られている。東九州では北九州市の天観寺窯跡群に継ぐ大規模な群の形成が周知されており、この分野の研究に多くの資料を提供している。本格的な窯跡調査は、中津バイパス建設を契機として実施した。期間は昭和57年から59年の３カ年間に及ぶもので、草場窯跡、夜鳴池窯跡、踊ヶ迫窯跡、瓦ヶ迫窯跡を調査した。

これまで伊藤田窯跡群は西部、中央部、東部の大きく3地区に分けられ、西部地区は洞ノ上～城山地区、洞ノ上の支谷、城山の東側斜面部。中央地区は穂屋池を挟む東西丘陵部とした。東部地区は穂屋池東部の丘陵東向き斜面からさらに東の丸尾付近の広い谷が湾入する範囲までとしていた。

最近周辺部の開発に伴う確認調査によって、窯跡群の範囲の所見に変更が生じた。

伊藤田窯跡群の西限は、洞ノ上窯跡と認識されていたが、平成21年６月にこれより丘陵を一つ西に越えた寺迫遺跡の東南縁辺で須恵器窯跡が発見されたため、さらに西限が伸びた（注１）。この窯跡は（仮称、寺迫窯跡）丘陵先端から600mほど南に入るやや深い谷の奥部に２基確認されており、灰原出土須恵器から８世紀前半の須恵器窯跡である。

従来西限とされていた洞ノ上窯跡では東向き斜面で窯壁融着の須恵器が確認されており、窯体は未確認ながら窯跡と認識されている。時期は７世紀前半代と思われる。洞ノ上窯跡と谷を挟んだ東部丘陵斜面に城山窯跡群が位置し６基が調査されている（注２）。さらに谷の奥部に８世紀代の大谷窯跡が想定されている（注２）。今回調査したコンゲ窯跡は大谷窯跡より谷奥部に位置する。

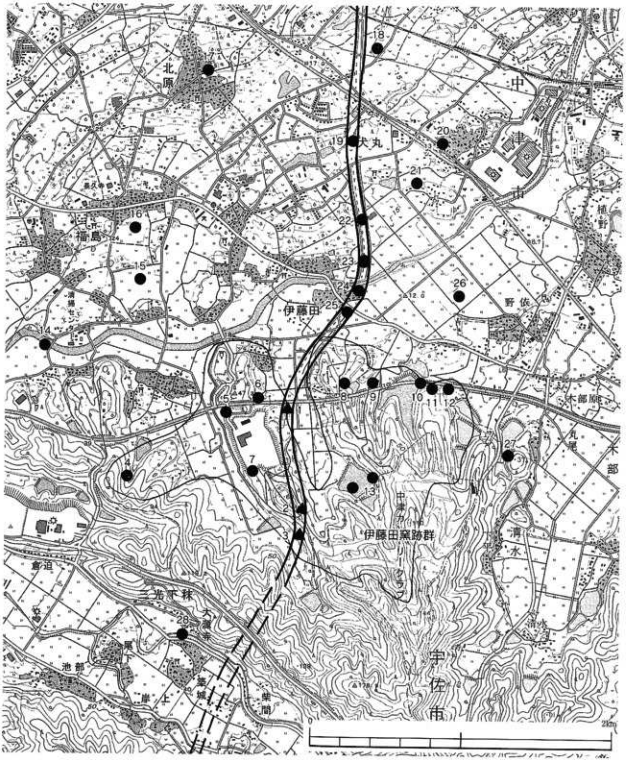
中央地区は城山窯跡群とは丘陵を挟んで東側の斜面を望む２本目の谷となる。この谷の先端に比較的近い西側斜面がさらに浅い支谷よって開析された南向きの緩斜面上に草場窯跡が構築されていた（注３）。現在のところ、至近地には窯はみられず、単独に構築されたものと考えられる。しかし、谷全体をみると谷奥部は西部地区と同様に穂屋池と呼ばれる貯水池が造られており、東西の両岸には複数の窯跡が確認されている。東岸は７世紀後半～８世紀初頭頃の須恵器が散布し、３基の須恵器窯跡が想定され、西岸には窯体の一部と瓦が確認されており、５基の瓦窯跡が想定されている（注４）。

注１中津市教育委員会浦井直幸氏の教示による。

２『伊藤田城山窯跡群』（中津市文化財調査報告第５集）中津市教育委員会、1985年３月

３『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（４）』平成４年３月　大分県教育委員会

４『樽垣遺跡　ホヤ池窯跡』（1994年度中津地区遺跡群発掘調査概告Ⅶ）中津市文化財調査報告第15集、1995年３月　中津市教育委員会



第１図　周辺遺跡分布図（1/25000）

1	**穂屋１号窯跡**	2	**穂屋２号窯跡**	3	**コンゲ窯跡**	4	洞ノ上窯跡
5	城山窯跡	6	草場窯跡	7	大谷窯跡	8	夜鳴池窯跡
9	踊ヶ迫窯跡	10	山田池窯跡	11	大池窯跡	12	瓦ヶ迫窯跡
13	ホヤ池窯跡	14	犬丸川流城遺跡	15	福島遺跡	16	三保遺跡
17	北原遺跡	18	諸田遺跡	19	上畑成遺跡	20	犬丸城跡
21	中尾城跡	22	北小枇杷遺跡	23	馬下遺跡	24	伊藤田田中遺跡
25	屋敷田遺跡	26	野依遺跡	27	清水城跡	28	大源寺遺跡

第2図　伊藤田窯跡群 調査窯跡位置図（1/400）

（中津市都市計画図26を使用）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

窯跡の調査方法は、①事前の予備調査で確認した窯跡プランと灰原範囲の確定、②窯跡主軸を基準にした調査地区の設定、③窯跡、灰原の発掘、④窯関連遺構の調査の手順をとった。窯本体の調査は、主軸と直交する層位確認用ベルトを焚口、燃焼部、焼成部に設定し、掘り下げを行った。窯床面まで達した段階で天井部、壁の残存、崩落状況や窯内流入土の堆積状態を記録した。この後、ベルトを除去し、床面の遺物を原位置で残した。完掘状態で実測・写真撮影を行った。さらに窯の改修・補修など構造を確認するために、床面、壁の断割り調査を行った。

灰原の調査は、窯主軸に沿って基盤層までの掘り下げを行い、灰層の堆積状態から操業状況を観察した。同様の観察を主軸直交方向の土層観察ベルトでも実施した。灰原の調査区は窯主軸を中心に２ｍ方眼で調査地区を設定し、遺物出土状況の観察・記録を行った。

理化学的調査については、残留磁気測定をコンゲ窯跡・穂屋１・２号窯跡のすべてで実施した。現地では窯床面の被熱状況が良好な範囲を選択し、５㎝×５㎝×２㎝程度の立方体の試料を12ヶ所で採取した。

第２節　コンゲ窯跡

調査は1,660㎡の斜面を対象として本調査を実施した。窯跡1基、灰原、土坑3基などを検出した。

窯跡は、北から南へ伸びる西向き斜面の谷奥部から手前300ｍに位置し、裾部からやや上部の標高35ｍ～37ｍに構築されていた。周辺部の地形は斜面下から西側丘陵に挟まれた谷の幅200～400ｍに水田が広がっている。この地区のほ場整備に伴い、窯跡の位置する斜面側が大きく掘削され、灰原が形成されていた裾部までの約10ｍが消失したものと想定される。

窯の所在する斜面は中腹と窯尻及び焚口付近が後世の造成を受け、窯の遺存状態は天井部、壁の約1/2と焚口を欠失していた。また、焼成部の一部を欠くなど窯の遺存状態は良好とはいえないが、ほぼその内容を知ることができた。灰原は裾部が消失しているため、その範囲や規模は不明である。焚口付近から斜面縁辺の標高約33ｍまでの８ｍ間に須恵器の散布がみられた。

窯跡（第４・５図）

窯の構造は半地下式無階無段登窯である。規模は現存長6.3ｍである。焚口を欠き、焼成部右壁から床にかけて主軸方向に1.4ｍの範囲を土坑１に切られている。煙道は先端部を欠く。燃焼部は残存長1.45ｍ、焼成部は4.45ｍ、煙道は0.4ｍが残っていた。幅は焚口寄りで0.9ｍ、燃焼部と焼成部の境付近で1.2ｍ、燃焼部中央で1.2ｍ、焼成部と煙道部の境で0.95ｍであった。このように窯の平面形はやや細長い寸胴型を呈し、燃焼部から焚口に向かいやや細く絞られた形状であった。焼成品から須恵器専用窯である。

窯内の状況は操業時の天井部や壁の崩落した痕跡を顕著に示すものではなく、最終操業後に、窯が廃棄され床面に残る遺物の上に地山の流入土と窯壁ブロックが、一定期間を経て自然に堆積した状態であった。

床面及び壁の構築状況を主軸方向と主軸直交方法の断割断面での観察を行った。

まず、窯の床面について、燃焼部から煙道までを主軸方向（Ａ－Ａ′）でみると、地山に粘土を4㎝ほどの厚さで貼付し構築していた。窯内部から①青灰色・黒色の還元、②白灰色・淡黄色の半還元、赤色の酸化状態での順で被熱を確認した。床面の傾斜は燃焼部で5度、焼成部で19度、煙道は焼成部から49度と一旦急な傾斜で立ち上がった後、27度の緩い傾斜で窯外に至る。床面には、粘土を貼付した還元層1枚がほぼ全面に確認できる。ただし、焼成部のうち燃焼部寄りの約1ｍの範囲に粘土を貼付し床面下に地山の還元層が確認でき、2枚の焼成面がみられた。少なくとも2回以上の床の張替を示すものと思われる。

横断面については燃焼部2ヵ所（Ｂ、Ｃ）、焼成部2ヵ所（Ｄ、Ｅ）の４ヵ所で断割調査を行った。焼成部Ｂ断面は煙道に近い位置にあたる。床は1枚である。右壁は土坑１で切られ、左壁は床と壁の境が木根で一部損なわ

れている。焼成部Ｃ断面は窯体中央部に位置する。壁の高さは30cmと高い。床から壁に粘土を貼付している。右壁は床面との境が緩く立ち上がる。左壁は床と壁の境が明瞭に屈曲し立ち上がる。焼成部Ｄ断面は燃焼部寄りの横断面となる。この位置に主軸で観察できた2枚の焼成面が左右の壁で確認できる。最終面のⅡ次床・壁は粘土の貼付がみられるが、左壁は床を張り替えた後に、粘土を貼付している。Ⅰ次床面・壁は粘土を貼付することなく地山のまま焼成されている。壁は外に開くが直立気味の立上りを示す。燃焼部Ｅ断面は焚口側の横断面で、右壁は床面から屈曲してほぼ直立気味に立ち上がる。左壁は緩く外へ開き気味に立ち上がる。床面は1枚で灰緑色で還元焔焼成を示していた。床面直上に炭灰の堆積はなく、焚口はさらに南西に位置したため、すでに削平されたものと考えられる。このことは主軸断面で燃焼部の焚口寄りの残存する先端部が還元されており、焚口に近い被熱状況ではなかったことと整合する。

窯壁の残存状況は床面から10cm～35cmの立ち上がりが残る程度で遺存状態は悪く、天井部に向かうドーム状の屈曲部を確認していない。

窯は焚口を欠失するものの、燃焼部、焼成部、煙道の構造は確認できた。

燃焼部は長さ1.45mほど残っていた。床面傾斜は緩く、焼成部とは床面傾斜の変換点で区分できる。床面には焼成部から移動した遺物の集積がみられた。小破片が流入土を混じてやや厚く堆積していた。床面には舟底状の土坑や床の張替など改造・修復の痕跡はみられなかった。

焼成部は長さ4.45mである。床面は燃焼部よりも傾斜が強くなる。須恵器焼成の主要部分であり、煙道付近から燃焼部との境までの範囲には床面に最終操業時の遺物や焼台が残っていた。床面の状況は、製品を取り出した後、不良品などが残されたものと思われる。床面の遺物は全体に広がっているが、3ヵ所にやや集中していた。1ヵ所は煙道寄りの左壁際、次に焼成部中央、さらに燃焼部との境付近である。多くの須恵器が床面直上に残っており、最終時の焼成品と考えられる。また、焼台として用いられた礫が焼成部中央の左壁際の2点と右壁寄りの1点が焼成時の原位置に据えられたものと考えられる。礫の表面は被熱し、須恵器が融着したものが認められた。また二次焼成を受けた甕胴部の大破片に杯底部の大きさで円形の影が数カ所みられ、焼台に利用されていたことが確認できた。

煙道は焼成部から急に立ち上がるが、先端の傾斜は緩くなっていた。平面形は掘削を受けており現状では矩形を呈していた。構築当初の形状も同様に矩形にちかい形状を想定しておきたい。

灰原（第６図）

灰原は、その大部分が水田の造成で消失しており、窯跡から斜面縁辺間の状況のみ確認した。この範囲では窯跡主軸に沿って基盤層までの掘下げを行い、灰層の堆積状態から操業状況を観察した。同様の観察を主軸直交方向の土層観察ベルトにおいても実施した。灰原の範囲は表面での観察や地形の起伏から主軸方向に８m、主軸直交方向10mを調査区とし、２m方眼を設定し、遺物出土状況の観察・記録を行った。ただ、この範囲は窯跡周辺と同様に等高線と平行して緩い段状に造成されるなど後世に本来の地形が掘削された状況であった。土層堆積状態を主軸方向でみると、燃焼部先端から４m付近については最下層の地山上層に自然堆積土の混礫黄褐色土層（７層）がみられ、さらにその上の混炭化物暗褐色土層（６層）、混礫褐色土層（５層）、混炭化物暗褐色土層（４層）、褐色土層（３層）、混炭化物暗褐色土層（２層）、表土層の順で堆積が確認された。炭化物は窯に起因する堆積層と考えられた。遺物は窯直前の主軸方向４m、直交方法８m範囲で出土したが量はコンテナ８箱程度と少ない。灰層形成について窯直前の層位で観察すると、地山直上の４層には炭灰層の顕著な堆積と遺物の出土がみられない。同様の傾向は主軸直交方向の土層についてもいえる。従って、当初灰原と想定していた遺物の散布範囲については、本来窯の操業に伴って形成されたものではなく、周辺の造成後に窯内の遺物などが流出し二次的に堆積した結果と考えられる。

その他の遺構（第７図）

土坑１は窯焼成部の右壁を切って構築されている。平面形は不整円形を呈し、外縁から二段をなし底面に至る。南北6.5m、東西2.5m～4.5m、深さ0.35mの規模をもつ。底面に若干の須恵器破片が出土したが、窯の操業に直

接関わる遺構ではない。

土坑２は窯跡の南東17m、標高37.5mに位置する。等高線と平行して構築されており、不整方形を呈する。長辺1.8m、短辺1.2m、深さ0.45mの規模をもつ。主軸方位は北41度西を指向する。底面に0.05m～0.15mの厚さで炭層が堆積していた。骨片などの遺物は発見されていない。

土坑３は窯跡の東17m、標高43mに位置する。等高線と平行して構築されており、不整方形を呈する。長辺1.5m、短辺1.2m、深さ0.7mの規模をもつ。覆土は炭化物を含む黄褐色土の堆積が確認できた。土坑の性格を示す遺物は出土していない。

出土遺物（第８図～第10図）

出土遺物はすべて須恵器であり、窯内からコンテナ10箱、灰原・周辺から８箱の計18箱である。

器種には蓋、杯、高台付杯、皿、甕などがある。窯内の遺物は実測可能な蓋20点、杯28点、高台付杯９点、皿20点、甕１点の計78点を図示した。灰原がほとんど消失していたため出土須恵器は少ないが、焚口付近などから出土した蓋３点、杯３点を灰原出土遺物として図示した。

窯内出土須恵器（第８図～第10図）

焼台の甕破片を除けば、中・大形器種は認められない。最終段階の製品は小形供膳形態の器種に限られる。

蓋（１～20）杯蓋である。口径は１の13.7cmから11の18.7cmと幅があるが、杯身の口径も大小ありこれとほぼ対応する。器高は2.0cm～3.7cmと低く、低平な器形である。天井部～頂部を欠失する16～20を除けばすべての蓋につまみを確認しており、蓋にはつまみがつくものといえる。つまみの形状には3種類ほどある。1～12は低平な擬宝珠をなす。1・6は頂部がやや高く、5・8は頂部が低くボタン状に近い形態を示す。13～15は幅と高さの割合がほぼ同じで、全体に丸みを帯びた擬宝珠状をなす。口縁部の形態に差がみられる。1～8、11、14～18などはほぼ先端で垂下するが、9は緩く外傾し、10は明確な屈曲をみせずに端部にいたる。20は鋭い屈曲を示す。調整は横ナデで仕上げられているが、天井部は回転ヘラ削り、つまみとその基部には横ナデが施されている。

杯（21～48）は口径が21の12.1cmから45の18.7cm（復元）と幅がある。器高は3.6cm～4.9cmの幅があるが、その差は比較的少ない。杯は安定した平底をもつ。21～36・39は体部と底部との境がやや丸みを帯びて立ち上がり、ほぼ直線的に口縁部へ至る。37・38・43・44は体部が直立気味に立ち上がる。42は大きく外傾する。46～48は直立気味に立ち上がり、口径に対する器高が3.5cm前後と低く浅い形態を呈す。杯の調整は口縁部～体部が横ナデ、底部は回転ヘラ切りで切れ離され、若干ナデを施す。

高台付杯（49～57）９点である。器形の特徴は杯と基本的に同じである。口径は49の12.2cm～54の13.6cmと57の15.8cmのように大小の差がみられる。高台は49・50・52は矩形をなし、このうち50はやや低い形態である。53・54は外側端部は細くなるが、53は高台全体が接地し、54は先端が接地する。55は高台の内側端部が細くなって接地する。56は逆台形を呈し全体が接地する。57は高台がやや外傾する。調整は口縁部～体部に横ナデ、底部は回転ヘラ削り、高台及びその周辺は横ナデである。

ヘラ記号が50の底部外面に刻まれている。「×」状と思われるが残存部が少なく正確な形状は不明である。51は高台が剥がれている。

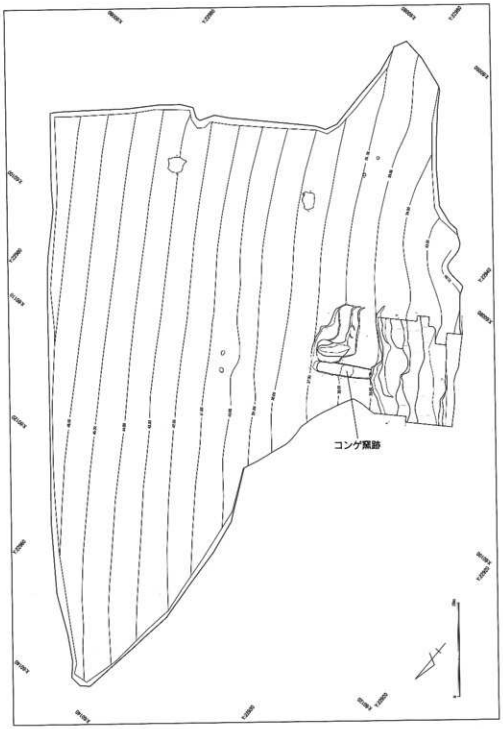
皿（58～77）大きさによって３種類に区分できる。小型品（58～61）は口径が14cm前後、器高1.5cm前後、中型品（62～67）は口径17cm前後、大型品（68～77）は20cm前後、器高は中型・大型ともに2.5センチ前後である。皿の形態はほぼ平坦な底部から体部下端が丸く屈曲し、短く立ち上がることが特徴である。体部の立ち上がりは、やや内湾するものが多いが、67のように体部上半からやや直立気味となる例や73・75のように外へ開く例がある。口縁部は端部がやや矩形を呈する傾向を窺えるが、丸く仕上げる58・60・68・69・73・74・76がある。調整は体部内外面に横ナデ、底部外面は回転ヘラ切りで切り離すが、58・75・77では回転ヘラ削りがみられる。

甕（78）球体をなす胴部上半～口縁部が残る。口縁部は短く、強く外反する。端部は平坦面をなす。胴部外面に縦方向の平行叩き、内面に青海波文の当具痕が残る。

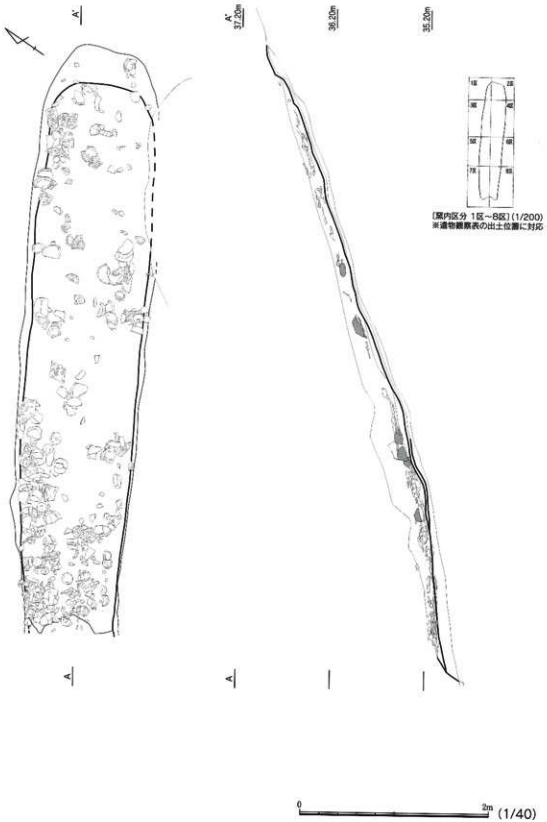
灰原出土須恵器（第10図）

蓋（79～81）杯蓋でつまみ付近が残る破片である。79・80は幅と高さの割合がほぼ同じで、全体に丸みを帯びた擬宝珠状をなし、81は低平な形態を示す。調整は天井部に回転ヘラ削り、つまみとその周辺は横ナデが施されている。

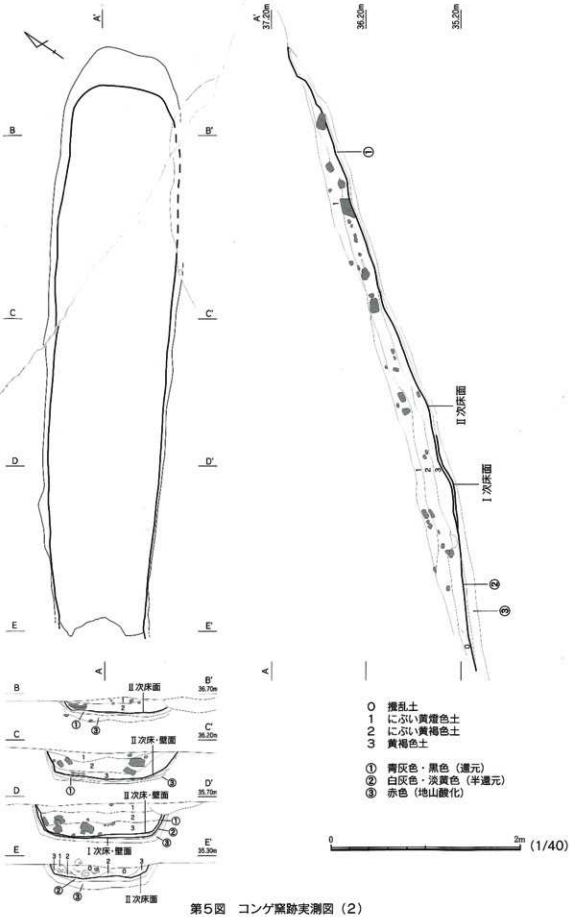
杯（82～84）82・83が直立気味に立ち上がるが、84はやや外傾する。ともに安定した平底をもつ。調整は口縁部～体部が横ナデ、底部は回転ヘラ切りで切り離され、83は若干ナデを施す。



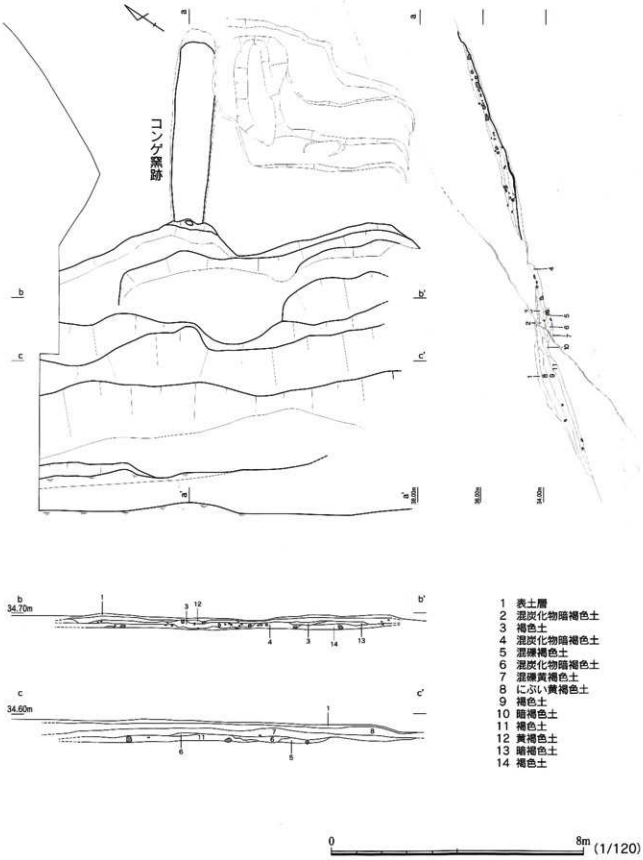
第３図　コンゲ窯跡及び周辺地形実測図（1/400）



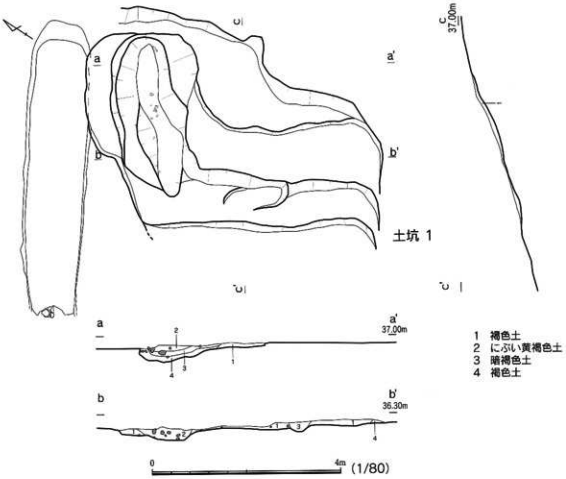
第４図　コンゲ窯跡実測図（1）

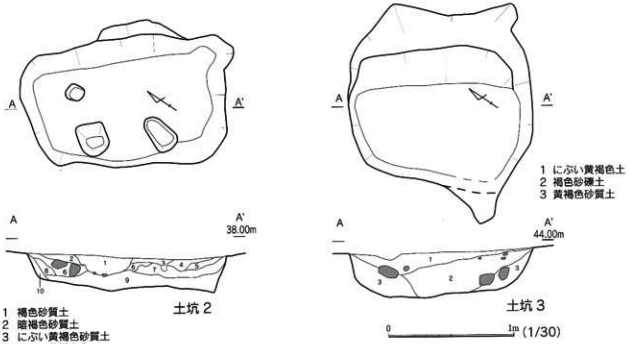


第５図　コンゲ窯跡実測図（２）



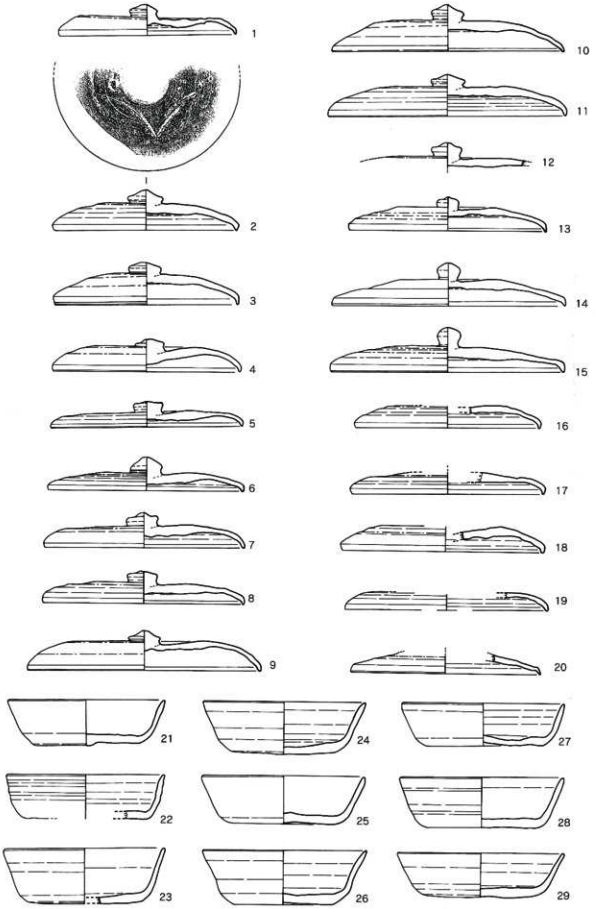
第６図　コンゲ窯跡・灰原実測図



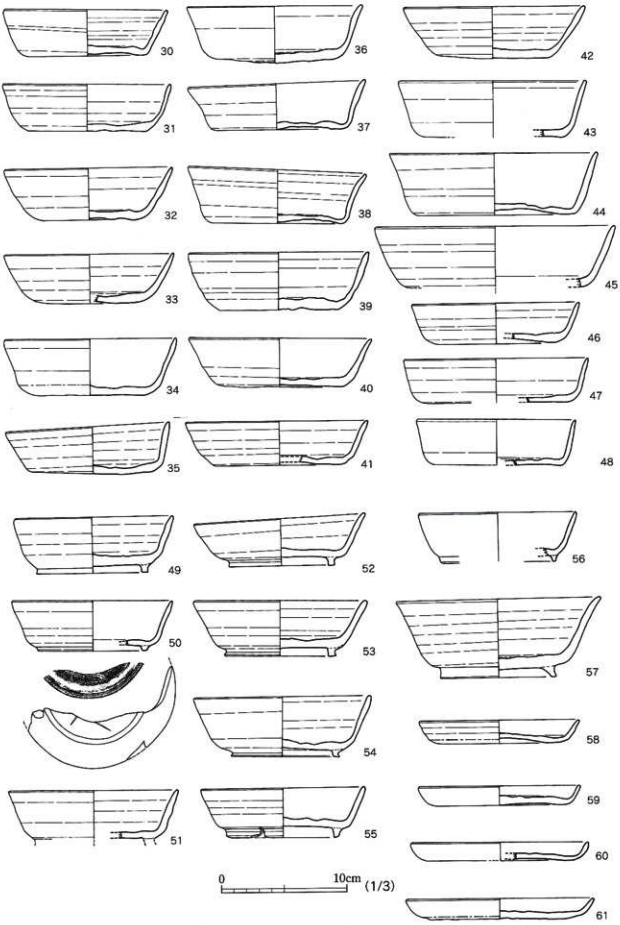


1　褐色砂質土
2　暗褐色砂質土
3　にぶい黄褐色砂質土
4　にぶい黄褐色土
5　灰黄褐色土
6　褐色土
7　オリーブ褐色砂質土
8　暗褐色砂質土
9　黒褐色砂質土
10　褐色砂質土

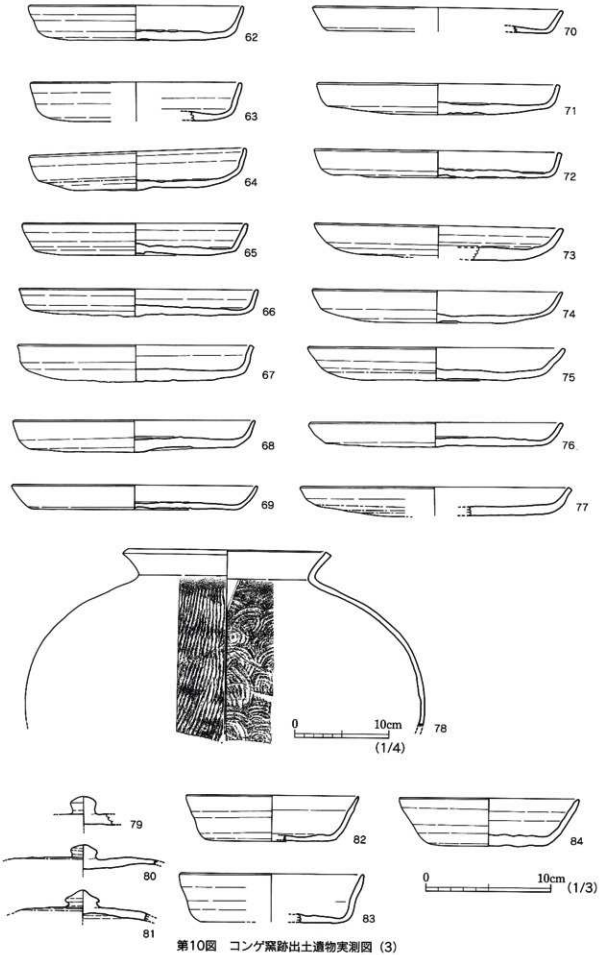
第７図　コンゲ窯跡周辺土坑 1～3 実測図



第８図　コンゲ窯跡出土遺物実測図（1）



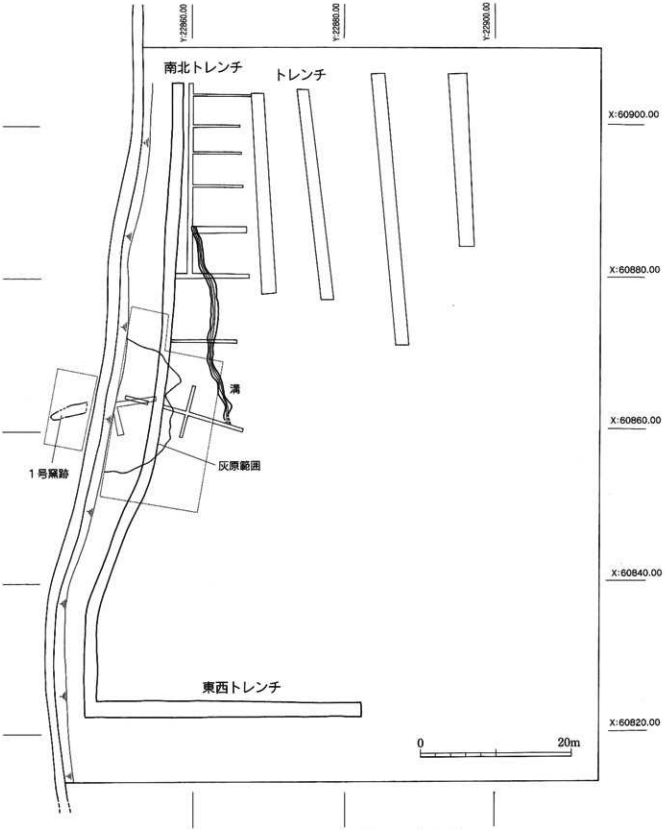
第９図　コンゲ窯跡出土遺物実測図（2）



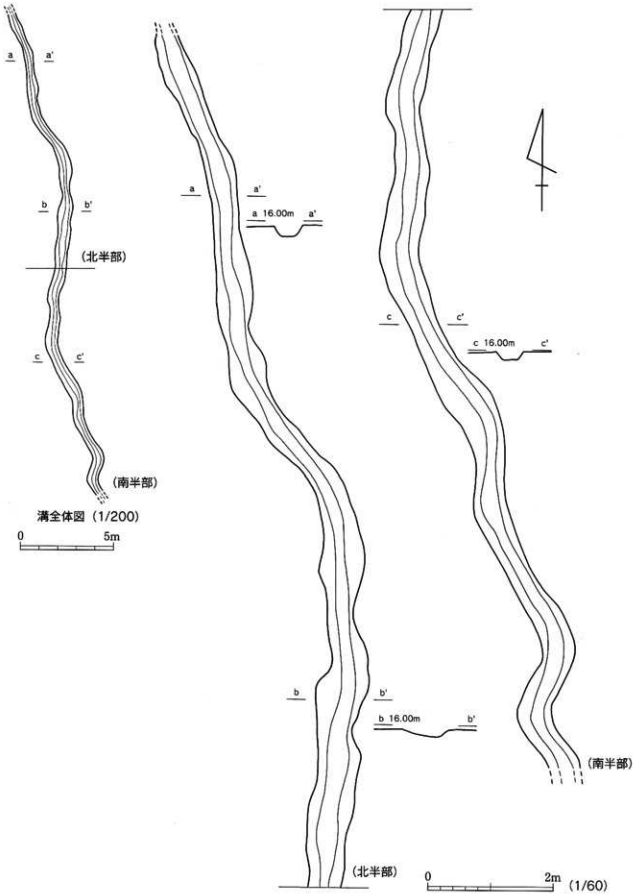
第10図　コンゲ窯跡出土遺物実測図（3）

第３節　穂屋１号窯跡

調査区は、穂屋池を奥部にもつ幅の広い谷を東に望む丘陵西斜面及びその斜面に接する谷部にあたる。谷開口部に近くやや谷が広がる位置である。調査対象面積は、7,000㎡であったが、調査を平成16年度と平成20年度の２回に分けて実施した。第1回目の調査は調査区の北半部であり、溝や灰原の一部を検出した。



第11図　穂屋１号窯跡及び周辺遺構配置図（1/500）



第12図　穂屋遺跡出土溝実測図

溝は確認長さ27m、幅0.5m、深さ0.15mで北から南へ蛇行気味に伸びていた。断面形は底面がやや平坦な台形を示していた。堆積土は上下２層に区分でき、上層は黄褐色粘質土、下層は砂層であった。時期は溝内から出土遺物はなく、不明である。窯跡に伴うものではない。灰原は窯跡の調査と合わせて実施することとし、土層断面の観察のみ行った。

第２回目の調査では、１回目調査で確認されていた窯跡及び関連遺構の調査を主眼に実施した。調査区は窯跡の位置する斜面と裾部から水田に及ぶ灰原範囲の340㎡であった。調査は窯跡１基、灰原について実施した。

窯跡の所在する丘陵は、南から北へ伸びるやや東へ偏するが、この丘陵の上部は平坦に造成されている。南側は圃場整備に伴い地形が改変されているため、明らかでないが旧地形は窯の所在する丘陵の東側に沿って支谷が形成されていたと思われる。

窯跡は丘陵裾部の標高17m～19m付近に構築されていた。窯体は焚口と燃焼部付近が裾部に設けられた農業用水路工事で大きく切られ、消失していた。窯体の横断面が法面に露呈していた。焼成部は斜面に設置された溝で窯の主軸に直交する形で切られていた。煙道部にあたる斜面上部は開墾により底面近くまで掘削を受けていた。天井部と壁の1/3～1/2もすでに失われていた。また、当該地区が竹林となっていたため、窯壁・床が竹根によって亀裂を生じ、大きく損なわれていた。このように窯の遺存状態は、ほぼ焼成部が残るのみで不良であるが、窯構造の一部について知ることができた。灰原は窯東部の水田面、標高16.2m前後に形成されていた。窯前庭部付近の状況が掘削されていて不明であるが、灰原のほぼ全体を把握できた。

窯跡（第13図）

窯の構造は焚口と燃焼部を欠くが、現存長4.7mの規模をもつ半地下式無階無段登窯である。遺存状態は不良であるが、煙道に向かってやや細くなる平面形態を呈する。焼成品から須恵器専用窯といえる。

床面の傾斜角は焚口寄り約１mでは37度と急傾斜となっているが、被熱赤変面が露呈しており、焼成面が剥落もしくは削られたため急角度となったものと考えられる。位置的には焼成部にあたる。上部の焼成部床面の残存部では23度の傾斜である。

煙道の床面は竹根の影響を受け小ブロック状となり、本来の形状とは大きく変化したものと思われる。
両壁は残っていなかったが、調査区西辺の土層断面は右側の地山が被熱、赤変しており、壁の一部とみられる。このため窯尻は若干調査区外へ伸びるものと考えられた。

窯内の状況は、操業後短期間で天井部や壁が崩落、堆積したものであった。

窯の構築状況を床面及び壁の断割断面で観察した。まず、窯の床面は残存部を主軸方向（Ａ－Ａ′）でみると、地山に粘土を６㎝～12㎝の厚さで貼付し構築していた。特に燃焼部下半は厚く12㎝を確認できた。被熱状態は①層青灰色の還元範囲６㎝、②層灰黄色の半還元範囲6㎝で、地山に④層赤色の酸化範囲が6㎝程あった。横断面については、焼成部の２カ所（Ｂ、Ｃ）で断割調査を行った。Ｃ断面は最も下位にあたり、床の左半部が大きく削られていた。右半部の被熱状態は、還元、半還元、酸化の段階的な範囲を確認した。床は①層還元焔焼成の最終床面と下層に一部に②半還元層がみられ、さらに下層の地山に酸化焔焼成範囲が確認できた。右壁では最終時床①層が壁の下辺まで貼付されていた。上部はやや剥落していた。壁は内側に2㎝～3㎝の還元層がみられその内側は半還元の黄褐色を呈しており、最大10㎝と厚く粘土を貼付し構築されていた。最も残りのよいＢ断面は、平坦な床から右壁で明確な角度をもってやや内傾気味に立ち上がり、左壁は床と壁が不明確で丸く湾曲して立ち上がる。床は中央部の最終床面下に③層の還元層が残っており、Ⅱ次床の一部といえる。左壁の立ち上がりから床面の左1/3にかけて半還元の②層がⅡ次床と対応する。その下層は被熱赤変した④層が左壁上端から床全体に厚さ２㎝～９㎝の範囲でみられた。この④層までが粘土の貼付により床・壁が構築されている。右壁は最終床面①層に対応するのは、①層、①－２層となる。①－２層は最終時に壁のみを補修した結果といえる。⑤層は一見③層と対応するように見えるが、④層の内側に下端の被熱範囲の形状が独立しており、Ⅲ・Ⅱ次に先行する浅い位置の床面に対応するものと考えられる。従って、Ⅰ次壁といえよう。

第３節　穂屋１号窯跡

灰原（第14図）

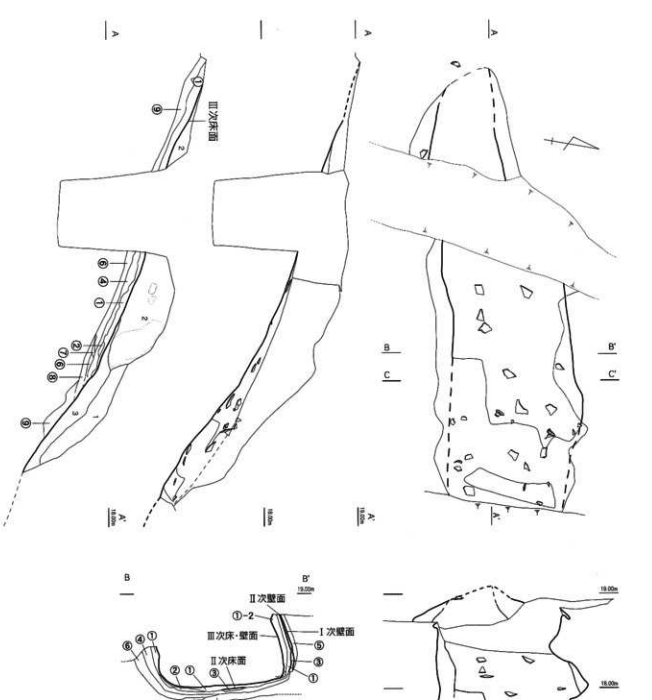
窯の前面は東に向かい緩やかに傾斜するがほぼ平坦面をなす。灰原は南北17.5m、東西８ｍの範囲に窯主軸を中心に半円形を描く形状で形成され、窯１基の操業と対応する。窯跡と灰原範囲との間の水路で焚口と前庭部、灰原の一部を失っている。

灰原の土層は次の11層に区分できた。

１層：粘質灰黄褐色土層（須恵器を若干含む）　表土層
２層：灰褐色土層（須恵器片・炭を含む）
３層：黒色炭灰層（須恵器片を含む）
４層：明青灰粘土層
５層：灰褐色土層（須恵器片・炭を含む）
６層：焼土ブロック層（須恵器片・木片を含む）
７層：粘質黒褐色土層（須恵器片・炭、焼土小ブロックを含む）
８層：灰褐色粘質土層（須恵器片・木片を含む）
９層：粘質砂性黒褐色土層（須恵器片・木片を含む）
10層：粘質黒褐色土層（小礫若干を含む）
11層：青灰色砂質土層

土層の堆積状況は、窯主軸方向に設定したＡ－Ａ′で観察すると、最上層の1層は表土層で二次的に堆積した須恵器の破片を含む。厚さ５㎝～38㎝で東部で厚くなる。２層は須恵器破片や炭若干を包含する。明確な炭灰層は窯に近い位置に顕著にみられ20㎝ほどの堆積が確認できたが東部では薄くなっていた。主軸と直交するＢ－Ｂ′、Ｃ－Ｃ′では10㎝～15㎝の厚さで確認できた。この広がりは南方向には４ｍ、北方向はＣ－Ｃ′で3.5mで途切れる。Ｂ－Ｂ′の北端は主軸から3.5m付近であるが水路に遮断され炭灰層の限界は確認できないが、25㎝の厚さがみられさらに延長すると考えられた。

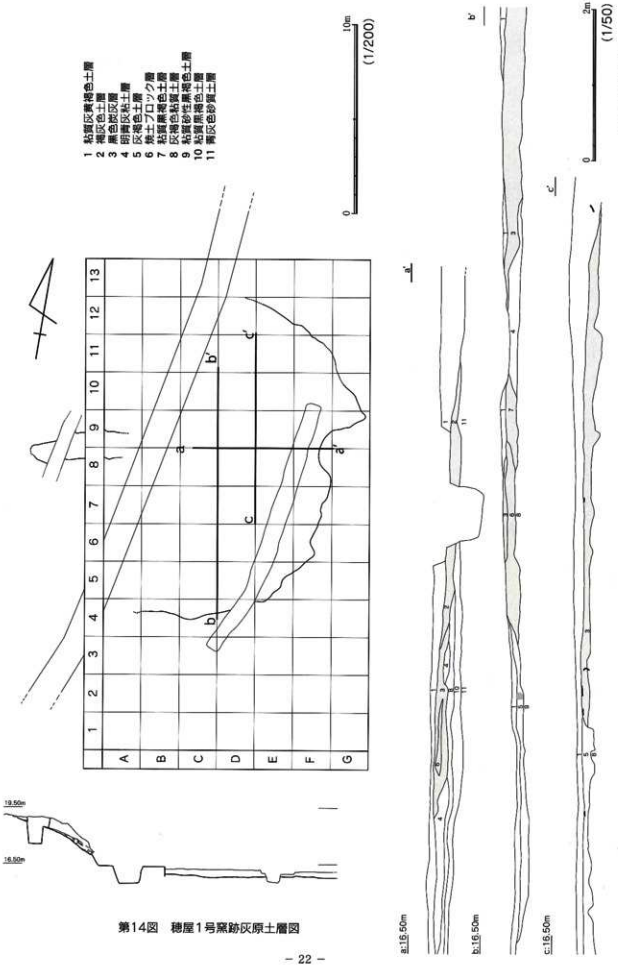
また、３層の下層は４層の粘土層であった。窯に近い位置に径４ｍ程度で堆積がみられるが粘土層の露頭と思われる。８・９層は若干須恵器破片、炭などを含むが上層の炭灰層の影響を受けたものであり、灰原形成面と考えられる。10・11層は地山の粘土層、砂層である。



1　暗黄褐色土（二次堆積土）
2　赤褐色土
3　青灰色土ブロック

①　青灰色土（還元）
①-2 青灰色土（還元）
②　灰黄色土（半還元）
③　淡青灰色土（還元）
④　浅黄褐色土（地山酸化）
⑤　青灰色土（還元）
⑥　燈色土（地山酸化）
⑦　灰白色土ブロック
⑧　にぶい黄燈色土（地山酸化）
⑨　赤褐色土（地山酸化）
⑩　褐灰色土

第13図　穂屋１号窯跡実測図



第14図　穂屋１号窯跡灰原土層図

出土遺物（第15図～第31図）

出土遺物はほとんどが須恵器であり、窯内からコンテナ５箱、灰原96箱、周辺３箱の計104箱である。

器種には蓋杯、杯（蓋・身）、高台付杯、蓋、鉢、甑、平瓶、壺、甕などがある。特に杯には古墳時代の伝統的な蓋杯とこの時期に出現する杯（蓋・身）、高台付杯の３種類がみられた。また、周辺から瓦類が出土した。窯内の出土須恵器は蓋杯の身１点、蓋２点、高杯４点、平瓶２点、壺２点、脚部１点他、実測可能な13点を図示した。灰原の出土須恵器は蓋杯では蓋75点、身87点、杯では蓋42点、身30点、高台付杯２点、椀２点、高杯55点、蓋４点、鉢６点、甑２点、焼台状製品１点、平瓶12点、壺12点、甕16点、土師器甑把手１点、周辺部の出土遺物10点を図示した。

窯内出土須恵器（第15図１～11、20、第16図62）

杯（１・20・62）1は蓋杯の身であるが、口縁部の立上りは低く受部より僅かに高い程度である。大きさは口径10.3㎝、受部外径12.3㎝、器高3.4㎝と小型ではない。底部は回転ヘラ切りで切り離す。その後、多方向のナデを施す。20・62は蓋である。20は口縁部が屈曲して垂下する。62は天井部から緩いカーブを描き口縁部に至る。

高杯（２～５）２は杯部、３～５は脚部付近の破片である。３・４は長脚、５は低脚である。

平瓶（７・８）口縁部で内湾気味に立ち上がる。

壺（10・11）10は口縁部破片で大きく外反する。11は体部下半で丸底をなす。底部外面に指頭による整形痕を残す。

その他（６・９）９は器種が不詳であるが杯の可能性も考えたい。６は脚部であるが、器種は壺類が想定される。

灰原出土須恵器（第15図～第31図）

蓋杯（12～19、21～61、63～182）12～88は蓋である。口縁部の形態によって７種類に区分できる。

12～19、21～30は天井部の器壁が厚く、口縁部に至る間薄くなり、口縁部が垂下する屈曲点で再び肥厚する特徴をもつ。端部はやや細まる。15は天井部の器壁は厚いが、口縁部は短く屈曲して垂下する。大きさは8.8㎝～11.7㎝、器高3.2㎝～4.1㎝とやや幅がある。12は口径8.8㎝と最も小型で、天井部は回転ヘラ切り未調整である。天井部は回転ヘラ切り後、ヘラ調整、ナデを施す例が一般的である。

31～46は天井部から丸くカーブを描き口縁部へ至り先端が細くなる特徴をもつ。41～46は口縁部がやや屈曲して垂下する。33～41はやや外傾する。46は口径11.4㎝、器高4.3㎝と小型である。

47～55は天井部から口縁部に向かい緩やかに湾曲、口縁端部が丸く肥厚する特徴をもつ。天井部は緩い山形をなすが、46・50は平坦である。大きさは47～54が口径10㎝～11.8㎝、器高3.05㎝～3.6㎝であるが、55は大型で口径14.6㎝、器高3.9㎝である。調整は横ナデ、天井部の切り離しは回転ヘラ切りである。

56～64は天井部から口縁部に向かい湾曲、口縁端部は内側にやや屈曲する特徴をもつ。大きさは最小の56が口径9.9㎝、器高2.8㎝、最大の64が口径11.1㎝、器高3.48㎝と全体に小型である。調整は横ナデ、天井部の切り離しは回転ヘラ切りである。

65～69は口縁部が短く屈曲する特徴をもつ。天井部はほぼ平坦をなす。調整は横ナデ、天井部の切り離しは回転ヘラ切りである。大きさは66～68が口径11.3㎝～11.8㎝、器高3.5㎝～4㎝であるが、69は12.9㎝、3.5㎝とやや大きい。調整は横ナデ、天井部は回転ヘラ切りである。

70・71は平坦な天井部から口縁部に向かい湾曲し、中位で明瞭に屈曲する特徴をもつ。70はやや外に開く。71は口縁端部が小さく外へ屈曲する。天井部はほぼ平坦をなす。大きさは70が口径11㎝、器高3.6㎝、71は口径11.3㎝、器高3.9㎝である。調整は横ナデ、天井部の切り離しは回転ヘラ切りである。

72～80は口縁部が短く外へ開く特徴をもつ。79・80の口縁部の器壁は薄い。天井部はやや平坦な山形をなす。76・79は焼歪みのため本来の形状ではない。調整は横ナデ、天井部の切り離しは回転ヘラ切りである。

81～88はヘラ記号をもつ。外面ヘラ記号は81・82、内面ヘラ記号は83～88である。

81は外面に「×」のヘラ記号である。外面天井部から体部にかけてやや長めに記されている。天井部は緩い山

形をなす。口縁部は明瞭に屈曲し垂下する。端部は丸く仕上げられている。

82は外面に「｜」のヘラ記号をもつ。やや長めの１本の線である。外面天井部から口縁部付近にかけてやや長めに記されている。天井部は頂部がやや窪むが全体には山形をなす。口縁部はやや外反する。

83は内面に「×」のヘラ記号をもつ。内面中央に短く記されている。天井部は緩い山形をなす。口縁部はやや外反する。器壁は天井部が厚く口縁部までは薄い。

84は内面に「×」のヘラ記号である。口縁部内面に短いが均等に交差する。やや低い形態をもつ。口縁部は屈曲点でやや肥厚する。

85は内面に1状のヘラ記号を確認できるが、破片であるため詳細は不明である。天井部の頂部を欠く。おそらく全体には山形をなすと思われる。

86は内面に「/|\」のヘラ記号をもつ。天井部内面中央を起点に３本が同じ方向にやや開き気味に伸びる。天井部は丸く、器高はやや高い。

87は内面に「|||」のヘラ記号をもつ。破片のため、２本の端部が不明であるが、ほぼ同じ長さと思われる。天井部内面に記されている。天井部から口縁部にかけてほぼ同じ器厚をもつ。

88は内面に「|主」のヘラ記号である。ハの字とその1本に直交する3本の組合せと思われる。天井部は丸く、器高はやや低い。口縁部は天井部から屈曲部下でやや窪み、口縁部は再び内湾に垂下する。

89～182は蓋杯の身である。

口縁部や受部の形態によって大きく４種類に区分できる。

89～104は口縁部が大きく反り、受部と合わせた形態が三日月型をなす特徴をもつ。底部はほぼ平坦をなす。大きさは口径8.5㎝～11.9㎝、受部径10.8㎝～14㎝、器高3㎝～3.7㎝とやや幅がある。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離され、未調整またはナデが施されている。このうち89～95は口径10㎝未満の小型品である。

103は内面に「×」のヘラ記号をもつ。天井部内面中央に記されているが、破片であるため詳細は不明である。

105～114は口縁部～受部の基部が太く、受部が口縁部に比較してやや短くなる傾向をもつ。このうち109・112の2点は口縁部が内傾して立ち上がり中位で上方向へ屈曲する。大きさは口径9.2㎝～10.8㎝、受部径11.2㎝～13㎝、器高2.9㎝～3.5㎝の範囲である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離され、未調整またはナデが施されている。

115～162は口縁端部が丸い特徴をもつ。115～125は口縁部～受部の基部が太い。大きさは口径10.6㎝～12.2㎝、受部径11.7㎝～14.3㎝、器高2.8㎝～4.4㎝と幅がある。

125は内面に「×」のヘラ記号をもつ。天井部内面中央に記されているが、交点を境に1/2を欠くため不明である。口縁部は短く立ち上がり、基部は太い。大きさは口径10.4㎝、受部径12.2㎝、器高3.3㎝である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離され、ナデが施されている。

126・127は底部が狭く体部が大きく外へ開く形態をなす。口縁部は短く外反しながら立ち上がる。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離され、周縁にナデが施される。

128は内面に「才」のヘラ記号をもつ。天井部内面中央付近に記されている。「＋」の間に1本組み合わされた形状である。口縁部は受部より僅かに高い。底部は平底状をなす。大きさは口径10.2㎝、受部径12㎝、器高3㎝である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離された後、ナデが施されている。

129は外面に「///」のヘラ記号をもつ。体部下半に記されている。刻みは２本が太く、１本は細い。このうち２本は器面の凹凸により線が途切れている。底部調整後にヘラ記号が刻まれたことが明瞭である。底部は平底状をなす。口縁部は長く太く、受部は細く短い。大きさは口径9.2㎝、受部径11.7㎝、器高３㎝と小型である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離された後、ヘラナデが施されている。

130は低平な形態をなす。口縁部は短く立ち上がり、受部より僅かに高い。底部は平底状をなす。大きさは口径10㎝、受部径12.4㎝、器高3.1㎝である。

131は内面に「｜」のヘラ記号をもつ。底部内面にやや長く刻まれているが、底部付近は完残しないため、単

独のヘラ記号か不明であるが、１本と思われる。低平な器形である。大きさは口径10.0㎝、受部径12㎝、器高3.1㎝と小型である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離された後、ヘラナデが施されている。

132は口縁端部が内傾気味に立ち上がる。133は口縁部が細長く立ち上がり、端部は丸く仕上げられている。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離された後、ナデが施されている。

134～138は小型品であり、大きさは口径８㎝～９㎝、受部径10.2㎝～11.2㎝、器高1.9㎝～2.7㎝である。この中で134は口径8.8㎝、器高1.9㎝で特に小型である。口縁部は太く短い。139～144は口径8㎝～9㎝、受部径10.2㎝～11.2㎝、器高1.9㎝～2.7㎝である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離される。136は回転ヘラ切り後、不定方向のナデが施されている。

145は内面に「×」のヘラ記号をもつと思われる。底部内面中央にやや長く刻まれているが、交点を境に1/2を欠くため全体の形状は不明である。口縁部は短く立ち上がり、受部は太い。大きさは口径9.2㎝、受部径11㎝、器高3.2㎝である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離され、ナデが施されている。

146は内面に「卅」のヘラ記号をもつ。縦方向の３条のうち２条はｖ字状をなす。底部内面中央付近から体部の立ち上がり付近まで伸びる。口縁部は丸くやや長く上がり、受部は短く太い。大きさは口径11.1㎝、受部径12.3㎝、器高3.5㎝である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離された後、ヘラ状工具による丁寧なナデ調整が施され、内面も指ナデが施されている。

147～162は口縁部が丸く、受部が短い特徴をもつ。147は口縁端部が細くなる。154は口縁部の立ち上りが短く、受部より僅かに高い程度である。157・162は上方向に丸く立ち上がる。大きさは口径9.6㎝～11.2㎝、受部径11.5㎝～12.8㎝、器高2.8㎝～3.5㎝とやや幅がある。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ切りで切り離されている。

148は内面に「||」のヘラ記号をもつ。底部内面中央をずらした位置にやや太く記されている。ヘラ記号の先端を欠くが平行2本線と考えられる。

155は外面に「×」と「∨」を並列したヘラ記号をもつ。体部外面に記されている。

163～176は口縁部が断面三角形や口縁端部が細く鋭角になる特徴をもつ。このうち163は口縁部が外反気味に立ち上がるが、口縁端部は細くシャープな形状をもつ。器高は2.2㎝と低平である。170・176は口縁部の断面形が二等辺三角形をなす。

177は内面に「×」のヘラ記号をもつ。底部内面中央に記されている。先端がやや不鮮明である。口縁部～受部は粗雑に折り込んだ形状を示し、成形の簡略化が窺える。大きさは口径9.5㎝、受部径11㎝、器高3.1㎝である。調整は横ナデで、底部は回転ヘラ削り後、ナデが施されている。

178は口縁部の立上りが長く伸びる特徴をもつ。大きさは口径12.2㎝、器高3.8㎝とやや大きい。調整は横ナデで底部は回転ヘラ切り後ナデが施されている。穂屋１号窯跡の焼成品ではないと思われる。

179～182は口縁部の破片である。180は口縁部の器壁が非常に薄く、細く仕上げられている。181・182は立上りが上へ伸びる。

杯（183～256）183～226は蓋である。口径は9.7㎝～16㎝と幅があるが、杯身の口径も大小ありこれとほぼ対応する。器高は2.1㎝～3.4㎝と低く、低平な器形である。天井部～頂部を欠失する209～227を除けば全ての蓋につまみがあり、蓋にはつまみがつくものといえる。つまみの形状には7種類ほどある。調整の特徴は、横ナデ、天井は回転ヘラ削り、つまみ周辺を横ナデである。

183～189はつまみがやや高い一群である。この中で183・184は幅と高さの割合が近く、全体に丸みを帯びた擬宝珠である。186は三角形に近い形状をなす。188・189はやや低い擬宝珠を呈する。184は内面の返りが口縁部とほぼ同じ高さをもつ。

189は内面に「＋」と「｜」を組み合わせたヘラ記号をもつようにみえるが、基本的に「×」で巾の広い板状の工具を用いたものと考えられる。天井部内面中央に記されている。

190～201は扁平なつまみをもつ一群である。190～196は扁平なボタン状なす。頂部は緩やかなカーブを描く。

193は内面に「×」のヘラ記号をもつ。天井部内面中央に記されている。1/4の破片であるため、ヘラ記号の一

方を欠くが形状は確認できた。

194は内面に「⊼」。「×」と「＝」を組み合わせたヘラ記号をもつ。天井部の口縁部寄りに記されている。ほぼ完存する。

196は内面に「へ」のヘラ記号をもつ。ｖ字状であるが大きく開く。天井部の口縁部寄りに記されている。完存する。

197はつまみの頂部が平坦な特徴をもつ。内面の返りは口縁部よりも低い。内面に「×」のヘラ記号をもつ。天井部内面中央に記されている。ヘラ記号の一方を欠くが形状は確認できた。

198～200はつまみが矩形をなす。198はこの中でもやや高い。口径8㎝～8.4㎝と小型である。内面の返りはそれぞれ形状が異なり、198はやや高めで細く外反する。199は端部が丸い。200は断面三角形を呈す。

201はつまみが周縁から内側に向かい一旦低くなり、頂部に向かい上がる。頂部は周縁とほぼ同じ高さで低い。

202～211は蓋の残欠である。203はつまみが185に近い特徴をもつ。203～207は口縁部を欠き、208～210、212～226はつまみを欠く。211は天井部に輪状の凸線が巡る。

203は内面に「||」のヘラ記号をもつ。平行２本線で天井部内面中央を起点としてやや長めに記されている。つまみは190に近い擬宝珠を呈する。

204は内面に「∧」のヘラ記号をもつ。平行２本線で天井部内面中央に記されているが、ヘラ記号の一方を欠く。つまみは低平なボタン状を呈す。

205は内面に「⫯」状のヘラ記号をもつ。破片であるため全体の形状は不詳である。つまみは201に近い上部が平坦で低いボタン状を呈す。206・207は低いつまみをもつ。

209は内面にヘラ記号をもつが、１本の先端が残る程度で形状は不明である。

221は外面に１条のヘラ記号が残るが、「－」「×」などの形状は不明である。

227～256は杯身である。全体に丸い体部をもち、調整は横ナデ、底部は回転ヘラ切りで切り離し、ナデを施す例もある。227は杯身の中で最も小型であり、口径8.7㎝、器高3.3㎝である。丸い体部で、口縁上部は内傾する平坦面をもつ。228～232は体部が丸く、口縁部は外反する。大きさは口径8.8㎝～9.8㎝、器高3.7㎝～4㎝である。

231は内面に「卅」のヘラ記号をもつ。底部内面中央付近に記されている。

233は内面に「艸」。「サ」を二重に重ねたヘラ記号をもつ。底部は厚く、体部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。233～235は体部中位からやや外反気味に立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後、ヘラ調整を施す。

237～249は体部から口縁部が比較的直線気味に立ち上がる。239・246・247は体部中位に凹線が巡る。

245は外面に「Ｙ」字状を重ねたヘラ記号をもつ。底部外面中央に記されているが、線は器面の凹凸により一部途切れている。

250・251は体部が外へ開く。250は大きさが口径13.6㎝、器高4.6㎝、251は口径17.7㎝、器高5.9㎝と最も大型である。

252・253は低平な形状をなす。このうち252は2.8㎝と低く、体部は下端が丸く湾曲し、口縁部との境に緩い段をもつ。

253は外面に「ｖ」字状を複数重ねたヘラ記号状の刻線をもつ。底部外面中央に記されている。線は途切れている。線は浅く本数も多く、ヘラ痕に近い。

254・255は内湾気味に立ち上がり、蓋杯の蓋に近い形状を呈す。口縁部が外に開き気味であり、器高が高いため、身とした。蓋杯の可能性も留保したい。

250は破片であり、232に近い形状である。

高台付杯（259・260）259は大きさは口径14.9㎝、器高6.3㎝である。体部と口縁部の境に鋭い段をもつ。高台は断面長方形の細長い形状を呈する。

260は内面に「ハ」のヘラ記号をもつ。底部内面中央に記されている。器形は丸く湾曲する杯をもち、高台は長く下半が外へ伸びる。

椀（257・258）体部の立上りが内湾気味で、深い形状をもつ。低部を欠失する。257は口径9.3㎝と小型である。258は外面に１条のヘラ記号をもつ。口縁部から体部下端に記されているが、先端は底部を欠くため、不明である。形状は他の線との組合せ残存部からは確認できない。

高杯（261～313）高杯は脚部の形状にかかわらず、杯部の確認できるものはすべて無蓋である。脚部の高低で２種に分けられる。短脚は261～277・281・282・293～305である。このうち261～264・276は杯部が杯身と同様の形態をもち、265・269・272～274は浅く蓋杯の蓋に近似する。275は杯部が体部から直立して立ち上がり、台付椀とすべき形態をもつ。262は脚部の特徴があり、脚部の基部が径３㎝と他の例が２㎝程度であることと比較して広く一見高台状を呈す。また、口縁部に刻みが数条刻まれており、焼成後の行為とみられる。短脚の高坏は、口径9.9㎝～13㎝、器高5.1㎝～9.5㎝と幅がある。概ね口径11㎝前後、器高７㎝前後の小型品といえる。277はやや深い杯部をもち、口径13.1㎝、器高9.4㎝と大型品である。脚部は低脚では高い例である。281・282は脚部を欠くが残存部の形状から低脚と考えられる。293～305は杯部を欠く脚部である。短脚の脚端部の形状に特徴がみられる。261・263・265・266・273・274・275・293・294・299・300は脚端部が上方へ強く屈曲する。このうち263・264・265・274・275は屈曲部がやや長く稜をもつ。262、297は短い脚部が外反し端部はやや肥厚する。268・269・276・298は端部が僅かに上方へ伸びる。267・272は端部が下方へ屈曲する。271、301は外へ長く伸びる。277は上下にやや肥厚する。296は上下に細く伸びる。302、303は緩く反る。

長脚は278～280、283～291、306～313である。杯部の形状や大きさは短脚の高杯とほぼ同様であるが、280・292のような大型品がみられ、各々の口径が15㎝、20㎝を超える例もみられる。ほぼ完形の278は杯部が直立する体部、平底状の底部で浅い形状をもつ。脚部はラッパ状に大きく開き、端部で上方へ細く屈曲する。279は杯部が椀状の丸い形状をもつ。脚部は柱状の筒部から脚端部に向かい緩く開く。283～292は杯部である。286は椀状の丸い体部をもち、289・290もやや深いが浅い形状をほぼ呈するものが多い。。306～313は脚部である。306～308は小型品である。309から313は脚部高が7.5㎝～９㎝と高い例である。脚端部は概ね上方へ短く屈曲する。高杯では261・266・269・276・282・296・306・313にヘラ記号はみられる。

261は内面に「×」のヘラ記号をもつ。底部内面中央にやや短く記されている。刻線は浅く細い。

266は内面に「＋」のヘラ記号をもつ。底部内面中央からややずれた位置に記されている。横方向の1条は直線的であるが、縦方向の1条は交点から下方向へ蛇行する。刻線は深く明瞭である。

269は内面に「卄」のヘラ記号をもつ。底部内面中央から体部に向かって記されている。横方向の１条は直線的であるが、１端が破片であるため不明である。縦方向の２条は下端で接するように近づく。刻線は深く明瞭である。

276は内面に「川」のヘラ記号をもつ。底部内面中央付近に記されている。１条は途中で一旦線が切れる。

282は内面に「ㅋ」状のヘラ記号をもつ。底部内面中央付近に記されている。上部で交差し、その後下端まで平行する。刻線は細いが、明瞭である。

296は内面に「卅」のヘラ記号をもつ。底部周縁付近に記されている。刻線は深く明瞭である。

306は脚部下半外面に「川」のヘラ記号をもつ。脚上部を欠くため、１端は不明であるがほぼこの形状と思われる。刻線はやや太く、深く刻まれ明瞭である。

313は脚部内面に「川」放射状に開く３本のヘラ記号をもつ。刻線は太く、深く刻まれている。

蓋（314～318）314は焼歪みが著しく、形態・大きさともに復元したものであるが、口径26㎝、器高4.4㎝と極めて大型である。つまみはボタン状の扁平な形状を呈す。内面の返りは細く長いが口縁部より下へ突出せず、僅かに内側に収まる。316も314と同様に大型品で口径18.8㎝、器高3㎝を超す。つまみは扁平で中央部が窪む。内面の返りは短く口縁部から出ない。315は有蓋高坏の蓋であるが、穂屋１号窯跡の焼成品ではなく混入したものと考えられる。317は短頸の壺類に伴う蓋と考えられるが、杯身の可能性も保留したい。318は肥厚する口縁部、内面に返りをもつ蓋とした。つまみを有さない。

鉢（319～326）319～324は小形の鉢である。口縁部が屈曲する特徴をもつ。大きさは口径9㎝～10㎝、器高3㎝

～5.5㎝である。325は口径22㎝で、体部は丸く内湾気味に立ち上がり、口縁端部でやや外へ開く。326は口径20.6㎝で、体部から口縁部へ内湾して立ち上がる。ともに底部を欠く。

甑（327～329）327は土師器である。328は須恵器甑の把手である。329は甑の下半部である。単孔の底部をもつ。

杯状土製品（330）丸底の杯にする器形であるが、器壁が厚い。底部を粗く削り穿孔しており、伏せて使用する焼台の機能をもつものと思われるが、二次焼成ほど使用された痕跡はない。内面の四方に底部から口縁部に向かい１条単位の波状文が施されている。

平瓶（331～342）口縁部が残る例は331～335である。331は体部が丸く肩の張りは全くみられない。把手はなくボタン状の浮文を付けている。口縁部は細い頸部からやや開き気味に内湾する。体部中位から肩部にカキ目調整を施す。口径7.8㎝、器高14㎝、体部最大径18.9㎝である。332・333も同様の形態を示す。334・335は口頸部破片である。336～342は体部であるが、336～339は体部最大径が14.9㎝～18㎝と小型化が顕著である。

壺（343～355）343はやや長い口頸部にやや肩が張る体部をもつ。肩に沈線が2条巡る。口径19.2㎝、体部最大径24.4㎝である。345・346は大きく開く口頸部をもつ。346は長い頸部は破片である。347～351は体部である。347は扁平な体部を呈し、最大径をもつ中位に2条の沈線が巡る。肩には櫛状工具による連続刺突文の文様帯が1単位巡り、文様帯内に対応する四箇所に円形浮文が貼付されている。349は最大径を体部下半のもち長胴状の形態を示す。351は体部最大径11.6㎝と小型である。肩に「川」が残るヘラ記号をもつが肩部の残存度が悪く、記号全体は不明である。352～355は脚部である。354・355は脚部中位に透かし状に円形の穿孔をもつ。

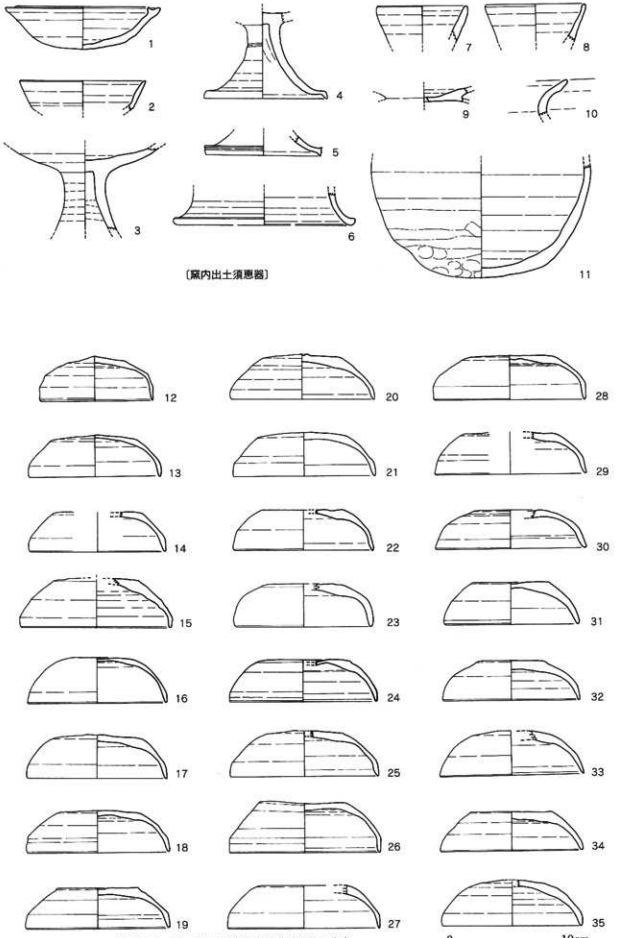
甕（356～372）356～359・365は口径15㎝、器高30㎝を超えない小形の甕である。315は小形甕の底部と思われる。361～363・366は口径46㎝を超す大形甕である。口頸部は比較的長く、大きく外反する。外面に断面三角形及びやや丸みをもつ凸線を巡らす。凸線の下には1条の沈線で区画された文様帯が２区ある。文様帯には３条１単位の櫛描波状文がそれぞれ巡る。また口縁部内面にも１条の櫛描波状文が巡る。362は緩く外反し、口縁部はやや内側に屈曲するとともに矩形に肥厚し、外面の下端は段をなす。段の下に４条１単位の櫛描波状文が２単位巡る。363は緩く外反し、口縁端部は外面が丸く肥厚し、その部分に段が付く。頸部外面には１条の沈線で区画された文様帯が３区あり、上の２区には７～８の櫛描波状文が1単位づつ巡る。下の３区は無文帯となっている。366は緩く外反し、口縁端部は外面が丸く肥厚する。363と形態的に近いが段は付かない。頸部外面には１条の沈線で区画された文様帯が２区あり、上の１区は４条１単位の櫛描波状文が２単位、下の２区には１単位の櫛描波状文が施されている。364・365は口縁部破片である。364は363と同巧の口縁部形状である。365は端部が肥厚することなく外反する。外面には口縁部下に円形の刺突文、その下に４条１単位の櫛描波状文が２単位巡る。

367～372は中形甕である。367～369は口頸部が短く、上端部は細まり、下端はやや肥厚する。370は細い口頸部で、端部は肥厚する。371・372は口頸部が短いが強く外反する。外面に縦方向叩き、内面に青海波文の当具痕を残す。371は外面にカキ目状の調整を施す。また362の頸部と胴部の接合部には頸部側に刻み痕が顕著である。

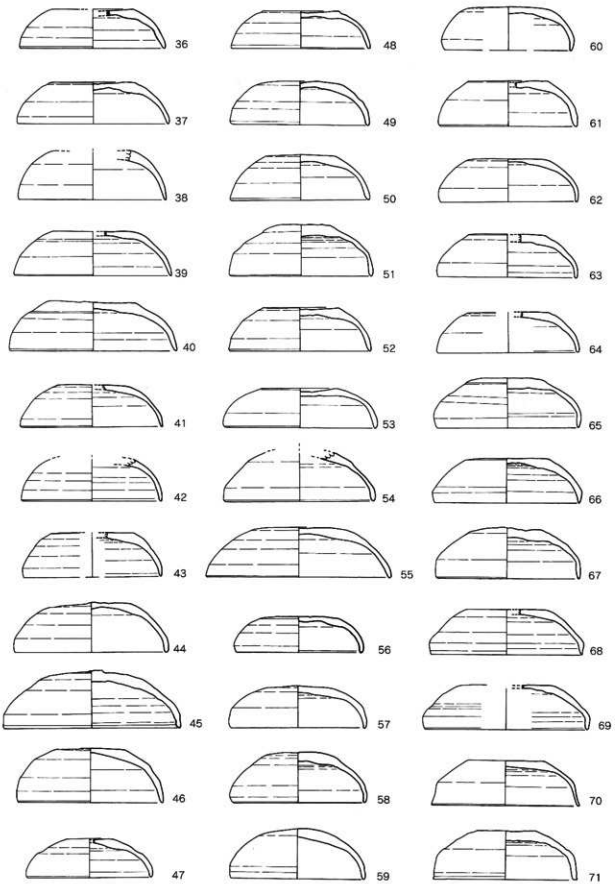
373～382は灰原範囲から採集した遺物である。373は蓋杯の蓋、374・375は高台であるが壺類の底部と思われる。376は高杯破片、377は短頸壺、378は壺体部上部破片、379は土師器杯、380は土師器甕胴部である。穂屋１号窯跡への帰属は不明である。381・382は平瓦である。381は凹面に布目が残り、凸面に木目直交の平行叩きがみられる。382は凹面に模骨痕が顕著に残る。

周辺部出土遺物（第32・33図）

383～392は窯跡及び灰原周辺から出土した遺物である。383～380は口縁部外面に沈線をもつ深鉢、387は波状口縁をもつ浅鉢と思われる。縄文後期～晩期と考えられる。388土師器甕である内面に斜め方向の刷毛目が残る。389は瓦質土器の口縁部破片である。390・391は姫島産黒曜石を素材とする石鏃、392は石包丁の破片である。

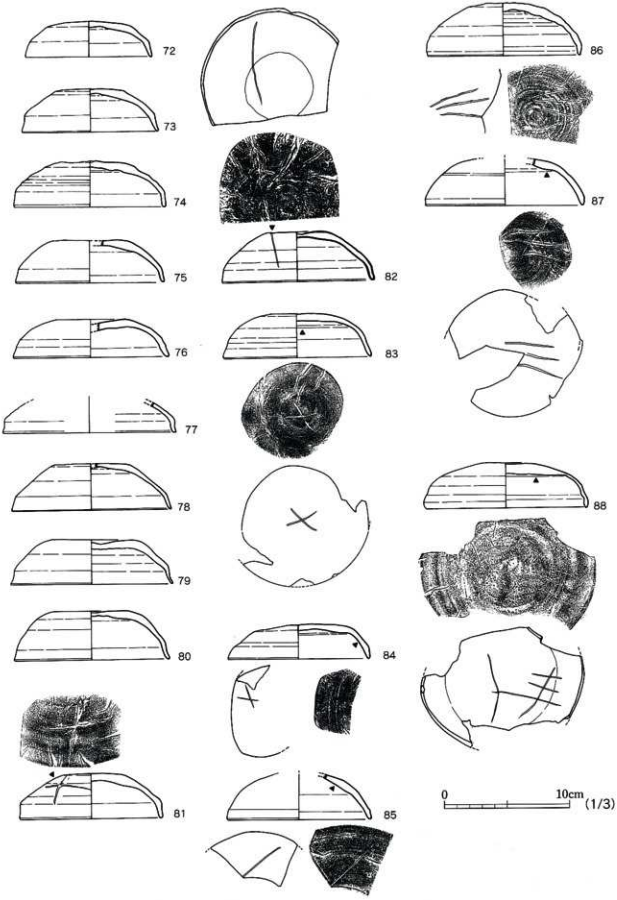


第15図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（1）
（1～11、20は窯内、12～19・21～35は灰原出土）

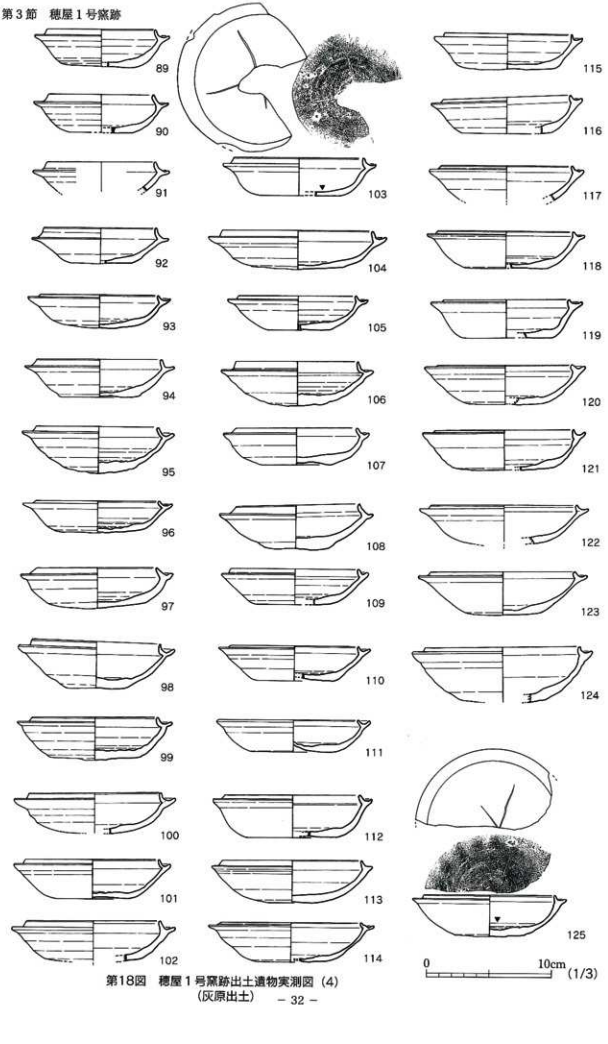


第16図　穂屋1号窯跡出土遺物実測図（2）
（62は窯内、他は灰原出土）

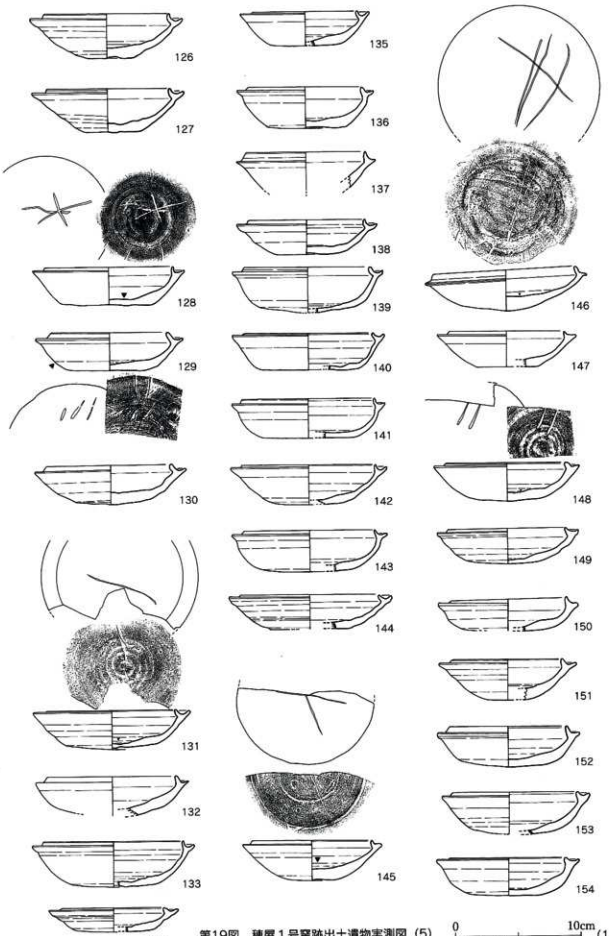
0　10cm　(1/3)



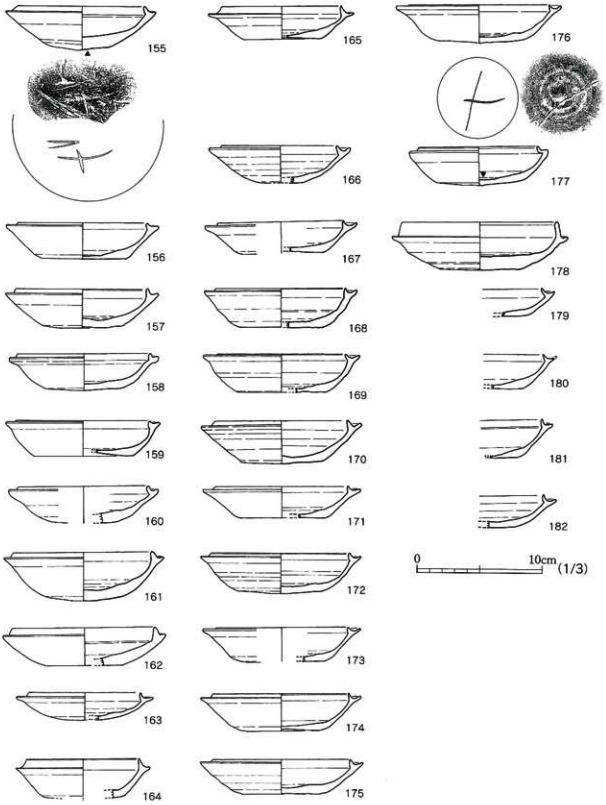
第17図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（3）（灰原出土）



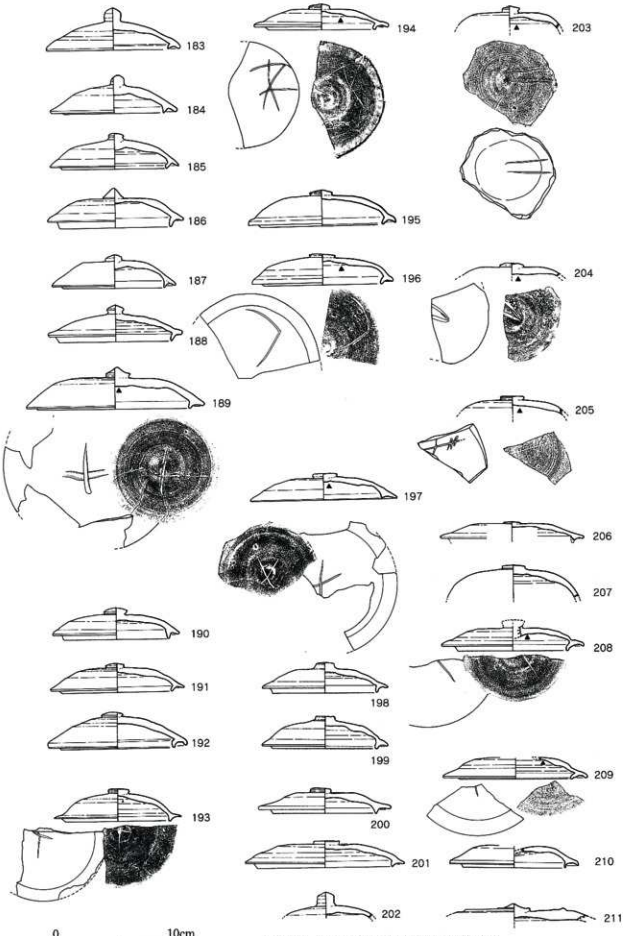
第18図　穂屋１号竈跡出土遺物実測図（4）
（灰原出土）



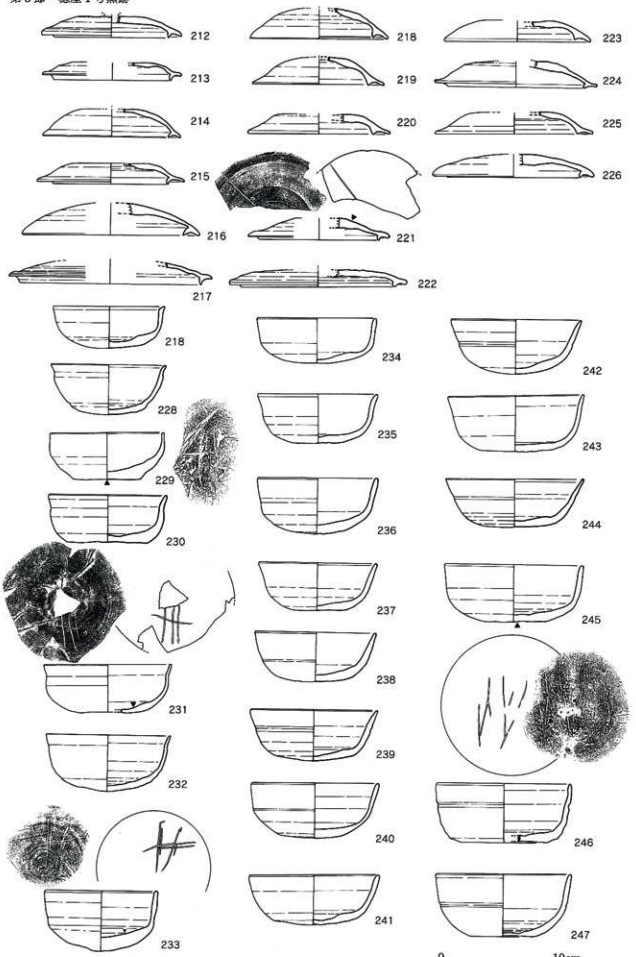
第19図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（5）
（灰原出土）



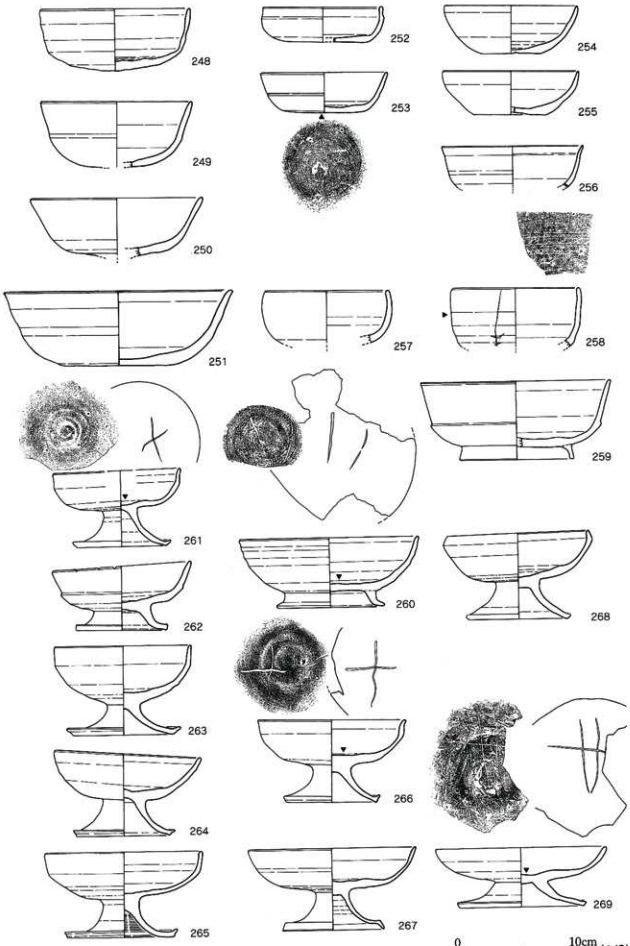
第20図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（6）
（灰原出土）



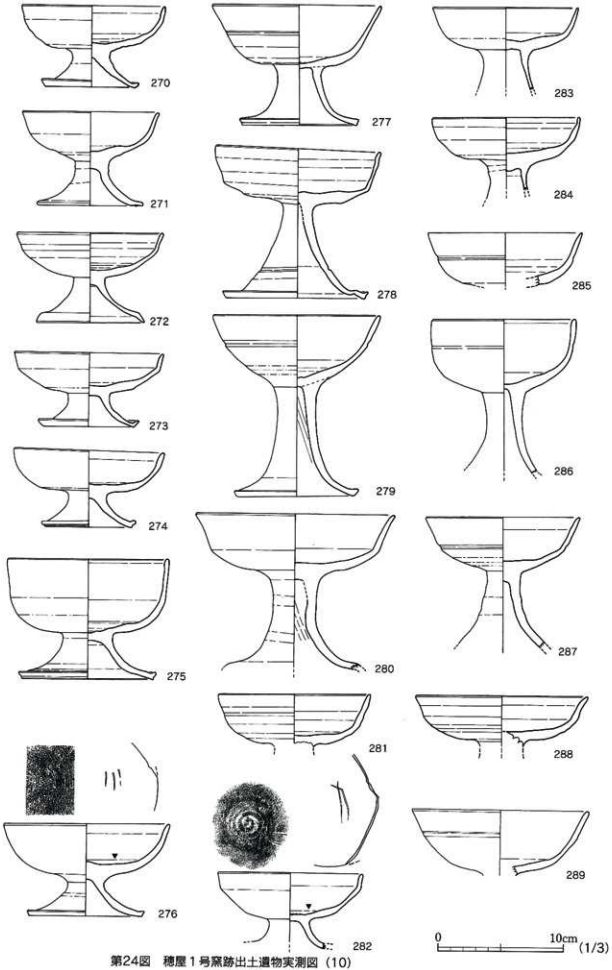
第21図　穂屋1号窯跡出土遺物実測図（7）
（灰原出土）



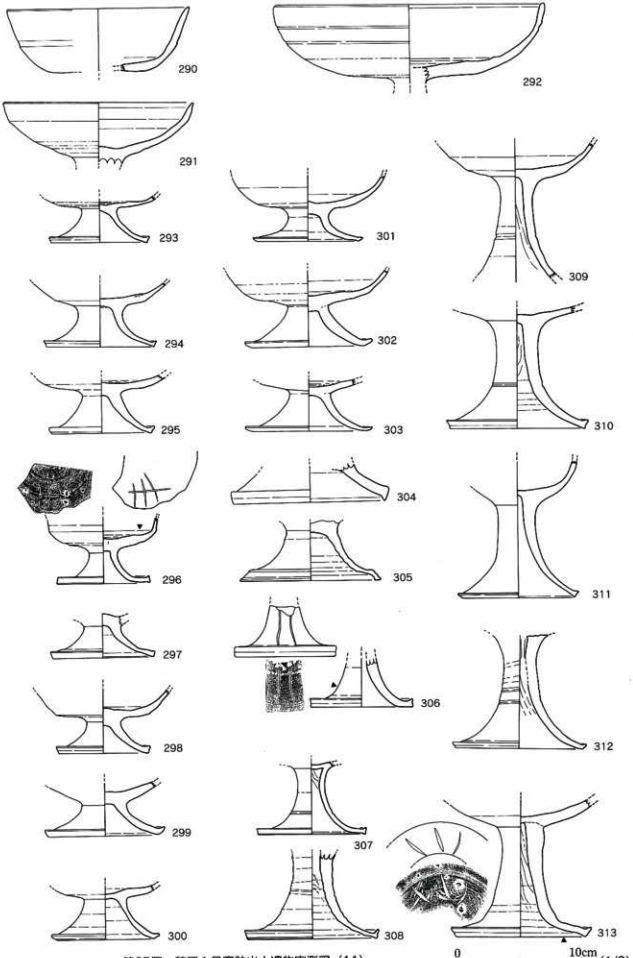
第22図　穂屋1号窯跡出土遺物実測図（8）
（灰原出土）



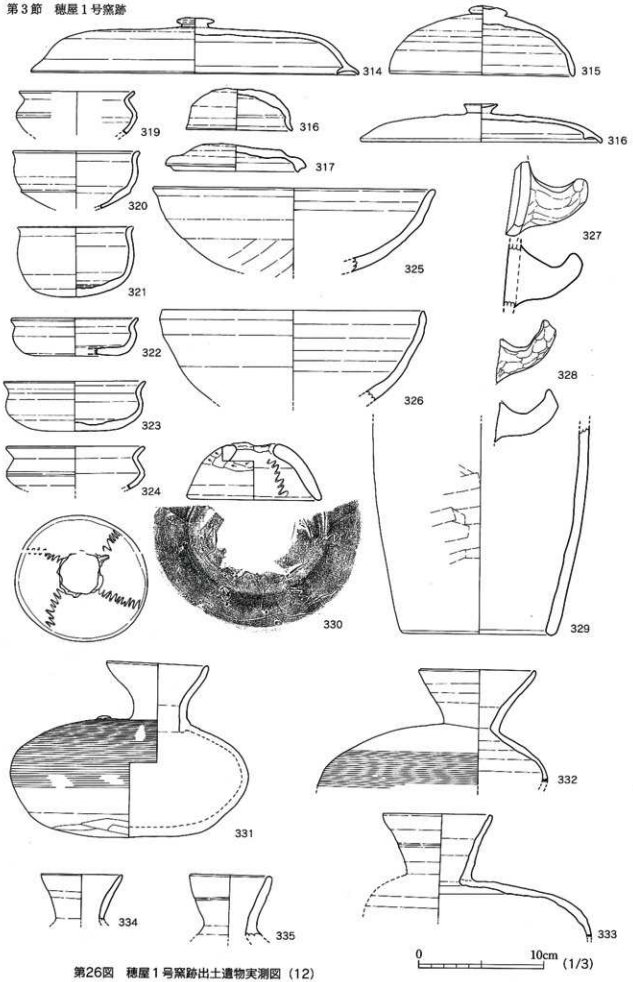
第23図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（9）
（灰原出土）



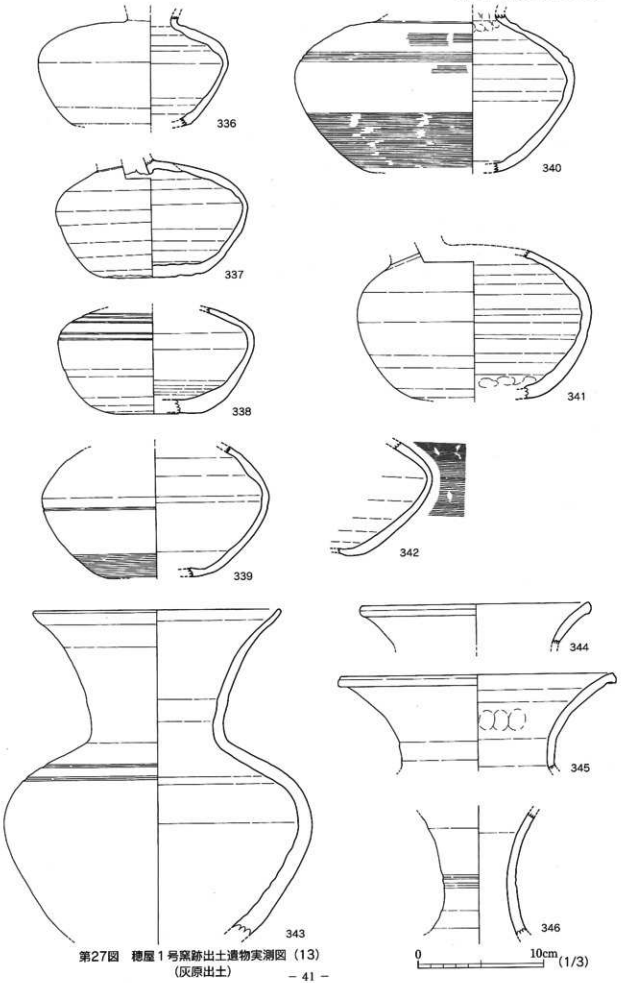
第24図　穂屋1号窯跡出土遺物実測図（10）
（灰原出土）



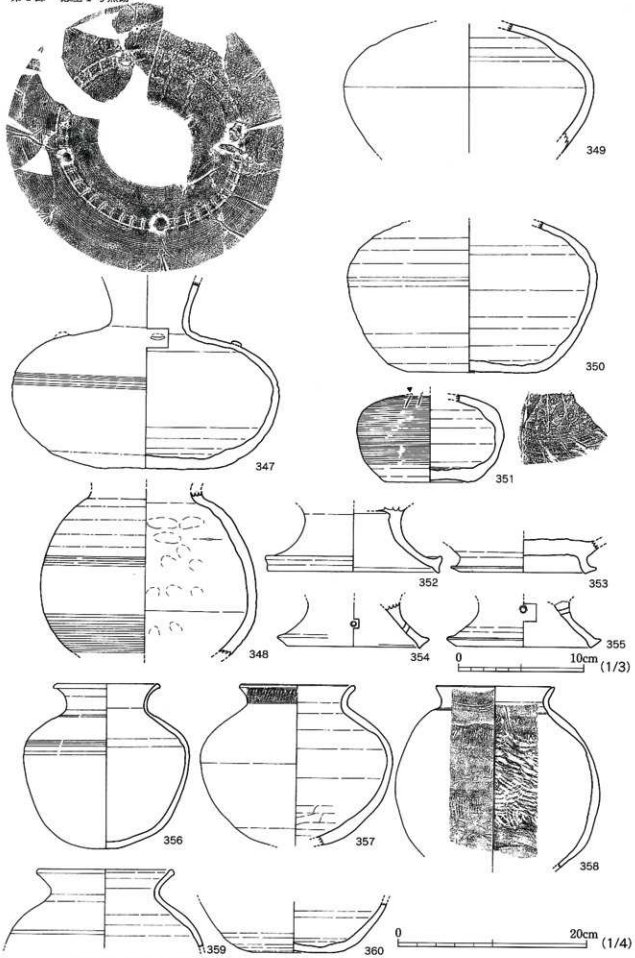
第25図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（11）
（灰原出土）



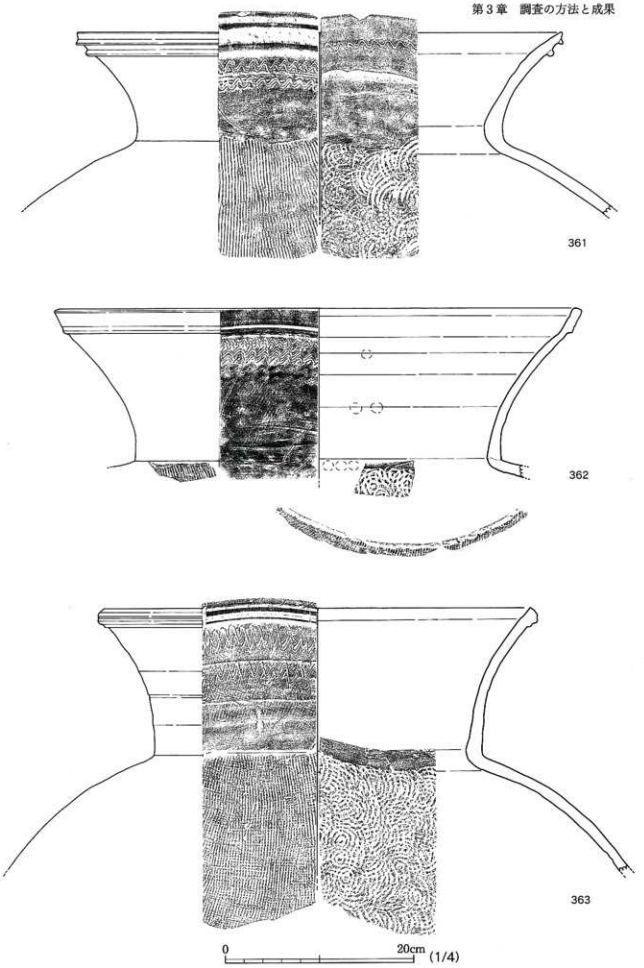
第26図　穂屋1号窯跡出土遺物実測図（12）
（灰原出土）



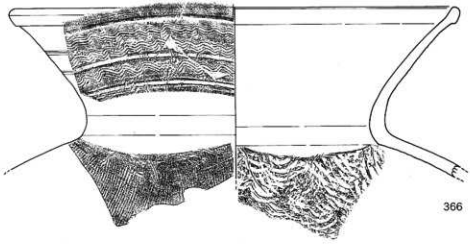
第27図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（13）
（灰原出土）

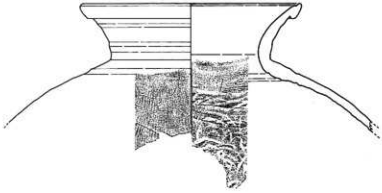


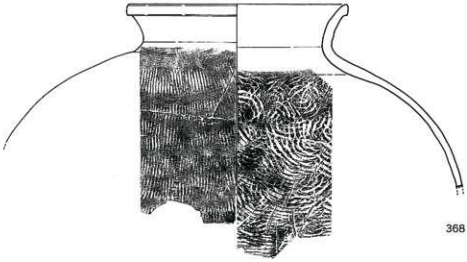
第28図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（14）
（灰原出土）



第29図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（15）
（灰原出土）

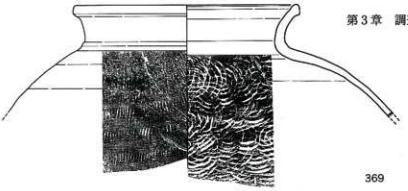




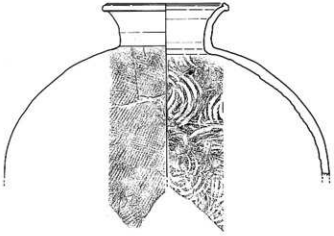


0　20cm　(1/4)

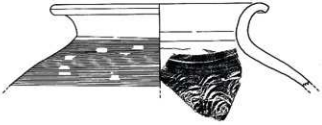
第30図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（16）
（灰原出土）



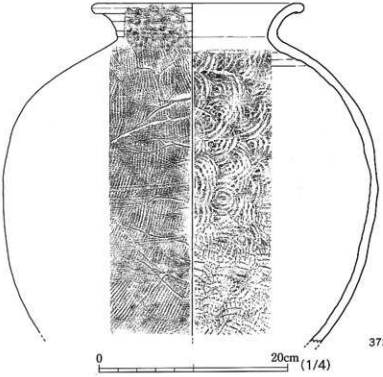
369



370



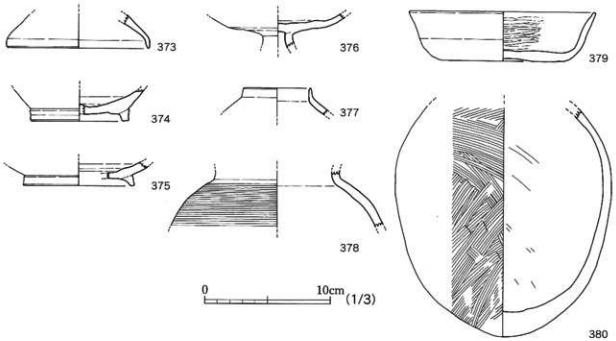
371

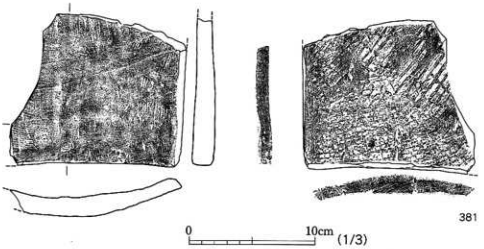


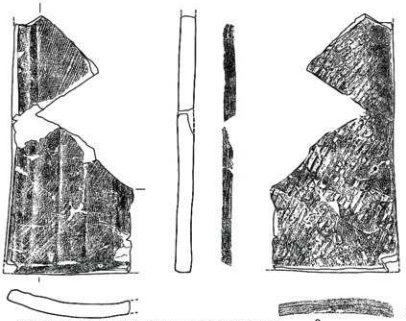
372

0　20cm (1/4)

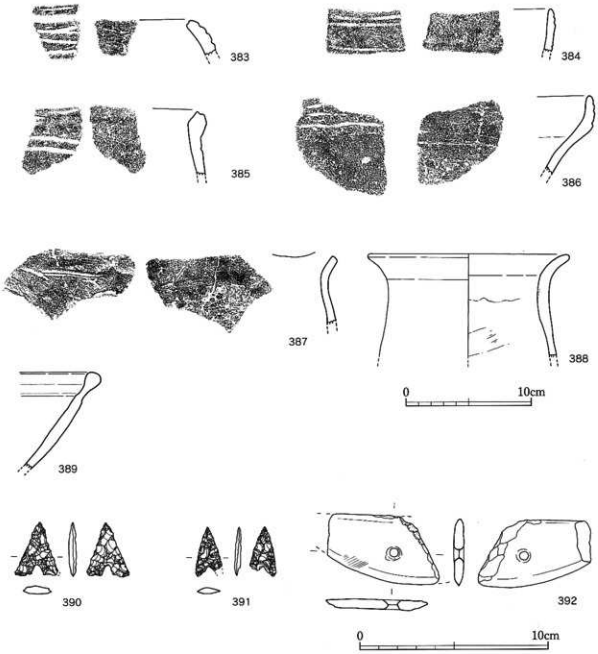
第31図　穂屋１号窯跡出土遺物実測図（17）
（灰原出土）







第32図　穂屋１号竈跡周辺部出土遺物実測図（1）



第33図　穂屋１号竪跡周辺部出土遺物実測図（2）
（384～390は1/3、391～393は1/2）

第４節　穂屋２号窯跡

窯跡の所在する丘陵は、穂屋1号窯跡と同じ南から北南へ伸び東側に広い谷が開析され、南端で大きく東西に分岐するが、東部の谷奥部に穂屋池が位置する。穂屋２号窯跡は穂屋１号窯跡の南450m、さらに南250mの同じ丘陵の反対斜面にコンゲ窯跡が位置する。

窯跡は谷奥部に近い丘陵中腹の標高32m～36m付近に残存していた。窯跡が位置する丘陵は頂部付近から中腹までを階段状に５段の平坦面をなす造成が行われていた。このため調査当初は窯の遺存状態は期待できなかった。検出作業の結果、最下位の造成で焚口～燃焼部付近を消失していたが燃焼部の状態はほぼ旧状を残していたため、窯の構造等を知ることができた。丘陵裾部は端部が水路と農道で切断され、やや上部となる裾部下辺は景観的には旧地形を残していると思われたが、造成により掘削等を受け改変されていた。したがって、灰原範囲の特定が困難な状況であった。

窯跡（第34・35図）

窯は焚口～燃焼部及び煙道の先端を欠くため、全体の構造は明らかでないが、現存長6.5mの半地下式無階無段登窯の構造をもつ須恵器窯跡である。遺存の状態は不良であるが、焼成部、煙道付近は残っており、操業の状況は把握できた。窯は最終操業後に廃棄されており、須恵器の破片が残存していた。窯内の土層堆積状態は、床面直上に多量の天井・窯壁の崩落が確認でき、その上に流入土の堆積がみられ、操業後の廃棄状況が示されていた。平面形は窯の煙道に向かってやや細くなる平面形態をもつ。幅は残存する窯尻で0.62m、焼成部中央で１m、焚口寄りの残存先端部で1.1mと台形に近い形状が想定できた。ただ焼成部下半では床・壁の改造に伴いやや幅が広がり最大1.35mとなっていた。

窯内各部位の状況をみると、焼成部は焚口が不明であり、現存する床面に燃焼痕跡がみられないことから、消失していると考えられる。焼成部は焚口寄りの範囲にⅢ次にわたる改造がみられた。最終時床面は窯の残存端部から窯尻方向へ1.7mの範囲、Ⅱ次床面はやや狭く主軸方向1.4m、右側の床は右壁に達していない。このようにⅡ次・Ⅲ次床面は前段階の床を削り新たに粘土を補填して修復したと考えている。改造の顕著な範囲での床面傾斜は構築当初のⅠ次床が22度、Ⅱ次床20度、最終段階のⅢ次床が18度と嵩上げが進むにつれて傾斜が緩くなっていた。

窯の被熱や構築状況をさらに詳しく観察すると、主軸方向（Ａ－Ａ′）ではⅠ次床面が最大厚さ0.05mで還元焔焼成の範囲が確認できた。Ⅱ次床面は窯の残存端部から窯内0.3m付近でⅠ次床面を大きく掘り下げ、窯壁片などを充填しその上に粘土を0.03m～0.1mほど貼付しⅡ次床面を構築したものである。Ⅲ次床面は同様にⅡ次床面上に粘土を0.05m～0.1mほど貼付し構築したものである。壁はそれぞれの床面に対応するが、Ⅲ次壁は右壁に顕著なようにさらに粘土の補填（Ⅲ次②）がみられた。

改造の顕著な範囲の上端から煙道に向かう床面は25度～29度と傾斜角を増す。被熱状況は下位ほど還元焔焼成が進まず黄褐色～暗赤褐色を呈するが、硬化していた。煙道付近ではさらに傾斜が増し34度となる。

床面の出土遺物は、燃焼部付近から完形に近い短脚の無蓋高杯数点出土した。焼成部には若干の破片が残存していた。

灰原

窯の前面の斜面は東に向かい緩やかに傾斜し裾部で平坦面をなす。地形的には旧状を示すようにみえた。しかし、トレンチを設定すると、灰原はほぼ消失しており、その起因と想定される開墾や水路の設置などに伴う掘削、また二次堆積土がみられた。

土層堆積状態は主軸方向でみると、窯を切断した造成面が４mあり、地山まで掘削されていた。裾部までは二次堆積土（１層）が0.1m～0.3mほどみられた。その下層に表土層（２層）が0.1m～0.5m堆積していた。斜面の上端付近に一部に炭化物層（３層）を確認できた。灰層の残存と考えられた。裾部には須恵器破片を含む暗黄褐

色土層がみられた。主軸直交土層断面は裾部の平坦面に設定したトレンチで観察した。主軸トレンチを挟んで東側に偏る南北約８ｍの範囲に遺物を包含する３層を確認した。

灰原はほとんど観察できないが、窯至近地の斜面上部の灰層の一部、おそらく二次的な散布と考えられる裾部の須恵器破片の広がりなどは、灰原の痕跡を示すものであろう。

灰原の土層は次の８層である。

１層：黄褐色粘質土層　二次堆積土

２層：黒黄褐色土層（礫を若干含む）表土層

３層：黒褐色土層（炭化物を含む）

４層：暗黄褐色土層（須恵器片を少量含む）

５層：黄褐色土層　地山

出土遺物（第36図～第39図）

出土遺物はほとんど須恵器であり、窯内から６箱、灰原24箱、他11箱の計41箱である。

器種には杯、蓋、高台付杯、高杯、皿、鉢、壺、甕、硯などがある。また、周辺部から瓦類や瓦質土器の破片が出土した。窯内の遺物は実測可能な蓋６点、高台付杯３点、高杯11点、壺６点、甕１点、硯１点の計28点を図示した。灰原がほとんど消失していたため出土須恵器は少ないが、蓋12点、杯３点、高台付杯４点、高杯３点、皿１点、鉢３点、鼎１点、壺５点、硯１点、甕３点など47点の計75点を図示した。また、古墳時代以来の蓋杯はまったくみられなかった。

窯内出土須恵器（第36図）

蓋（１～６）杯蓋である。口径は9.4㎝～12㎝、器高は残存度の良好な１が2.4㎝であり、低平な形状が基本と思われる。内面の返りは１がやや長く細いが、２は口縁部に対して短い。３・４は丸く短く口縁部より僅か下方へ出る。

高台付杯（７～９）ともに八字状に広がるやや長い高台が特徴である。体部は底部から丸く湾曲し、中位で外反気味に立ち上がる。大きさは口径12.5㎝、器高5.5㎝前後である。調整は横ナデで仕上げられているが、体部下端は回転ヘラ削りが施されている。

高杯（10～20）10は口径12.6㎝、器高10.4㎝、脚部はやや長めで端部は径8.9㎝と安定した形状をもつ。11～13は杯部残欠であるが、ともに浅い形状を呈す。14から20は脚部残欠で脚部高２㎝～５㎝と短脚であるが、14～16は特に低い。脚端部は外反り気味に伸びる傾向がみられる。

壺（21～26）21～23は口縁頸部の残欠であるが、口径8.2㎝～9.5㎝とやや細く、形状からみて平瓶の可能性がある。24は細い口縁部～頸部である。25は口縁部が大きく開く。

硯（27）硯面を欠く脚部の破片である。長方形の透かしが巡る。脚部の復元外径は15.2㎝である。透かし孔は長方形を呈し、20個巡るものと思われる。調整は横ナデ、ヘラ調整などで丁寧に施されている。

甕（28）胴部である。上位に最大径をもつ。外面に横～斜方向の平行叩き、内面に青海波文の当具痕が残る。

灰原出土遺物（第37・38図）

灰原がほとんど消失していたため、窯体の下辺に散布していた遺物を灰原出土遺物とした。出土遺物はほとんどが須恵器であるが、瓦質土器1点と瓦類が出土している。

蓋（29～40）杯蓋である。口径は10㎝～16.6㎝と幅があるが、10㎝～12㎝が多い。器高は２㎝～３㎝程度である。つまみは29がボタン状で中央部が窪む。30・32はやや低い擬宝珠をなし、31は乳頭状を呈す。内面のかえりは38のように長めの例も残るが、30・33・35・36・39のように丸く退化した例が目立つ。

杯（41～43）３点出土しているが、底部から丸みを帯びて立ち上がり、41・43は口縁端部で短く外反する。大きさは口径12.5㎝前後、器高3.5㎝前後で底径は７㎝前後である。調整は横ナデ、底部は回転ヘラ切りで切り離されている。

高台付杯（44～47）ともに長い高台が特徴である。44・45・47は外へ広がる。46はやや短く接地面が平坦である。体部は底部から丸く湾曲して立ち上がる。44は体部中位から直線的に立ち上がる。全体の器形を復元できる44は大きさが口径10.2㎝、器高4.2㎝である。調整は横ナデである。

高坏（48～50）48は杯部が杯と同様に器高に対して口径が広く浅い形状を呈す。脚部は杯部に比べ低く小さい。端部は丸く仕上げられている。49・50は脚部残欠であり、短脚であるが48よりもやや高い形状を呈す。

皿（51）浅い形状を呈する。大きさは口径25㎝、器高10.4㎝、底部は平坦で体部との境は丸みが残る。口縁部に向かって直線的にやや開き気味に立ち上がる。調整は内外面ともに横ナデを施す。

鉢(52・53・55)ともに破片のため、器形は不詳である。残存する体部上半は内湾気味に立ち上がり、口縁部内面に51は段、52は沈線状の凹みをもつ。調整は内外面ともに横ナデを施す。55は破片であるが鉢と想定した。口縁部は端部が外へ短く屈曲する。

54は杯状の器形と想定されるが不明である。口縁部外面に３条の櫛描波状文が巡る。

甕（56）破片のため、器形は不詳であるが、短い頸部をもつものと思われる。口縁部はラッパ状に開く。

壺（57～61）57は口縁部付近の破片である。頸部に３条の櫛描波状文が巡る。58は頸基部～体部上半付近の小破片である。残存部の形状から長頸壺と思われる。肩部にカキ目が残る。59・60は頸部～口縁部の破片である。59はやや太い頸端部から口縁部へ向かい開き気味に立ち上がる。口縁端部は上方へ短く屈曲する。60は短い頸部が外反し、口縁部は上方へ屈曲し直立する。口縁部下端は外へ拡張し、帯状に巡る。61は底部～体部下半の破片である。体部は丸いが底部は平坦と考えられる。

甕（62～64）口縁部の破片である。62・63は大きく外反する。口縁端部は丸く肥厚する。64は口縁端部が断面三角形をなし、下端に稜をもつ。頸部上部に櫛描波状文よる文様帯が2帯確認できる。上部の文様帯は１単位６条である。

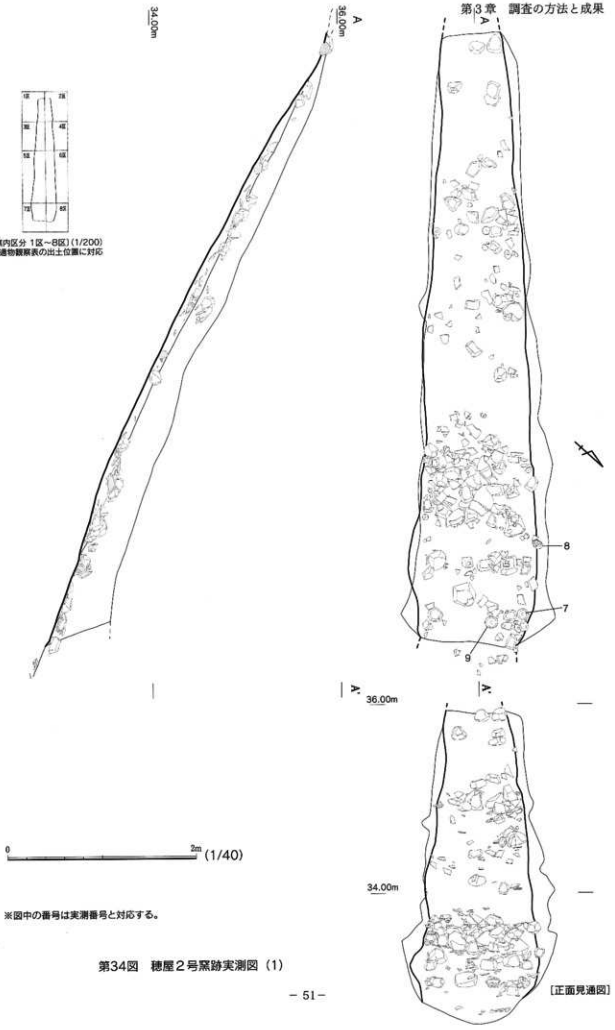
硯（65）破片であり、硯の可能性がある遺物と考えたい。脚部～硯面の一部と思われる破片である。脚部は残存部位が少ないこともあり、透かし孔が確認できない。硯面の一部は外堤部分と想定される。大きさは脚部径16.8㎝である。調整は横ナデで丁寧に仕上げられている。

その他の遺物

窯跡との帰属関係が不明な遺物である。66は鐙のつまみである。67は瓦質の土器であるが、破片のため、器種は不詳である。

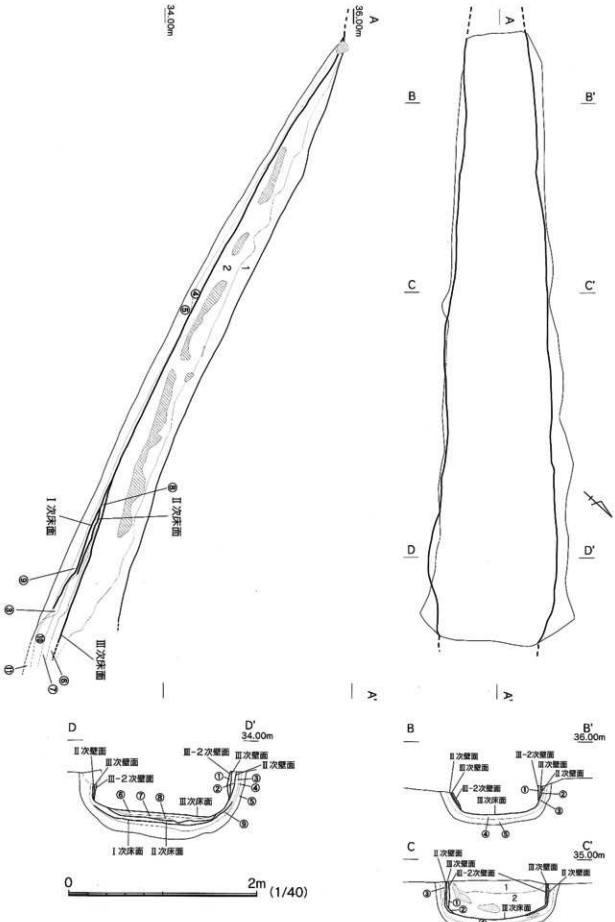
瓦類（68～75）68～73は平瓦である。凹面に糸切り痕、布目がみられる。凸面には平行叩き痕が残る。69は横方向の叩き痕が確認できる。70は凹面に糸切り痕、布目がみられる。凸面は横方向に木目直交平行叩きが残る。71は凹面に布目、凸面に斜方向の平行叩き、72・73は凹面に布目、凸面に縦方向の平行叩きがみられる。69・71～73は側端部が残り、70・72・73の凹面には模骨痕が顕著である。平瓦は形状から桶巻造と考えられる。

74・75は丸瓦である。凹面に布目、模骨痕が顕著である。凸面は縦～斜方向の平行叩きがみられる。

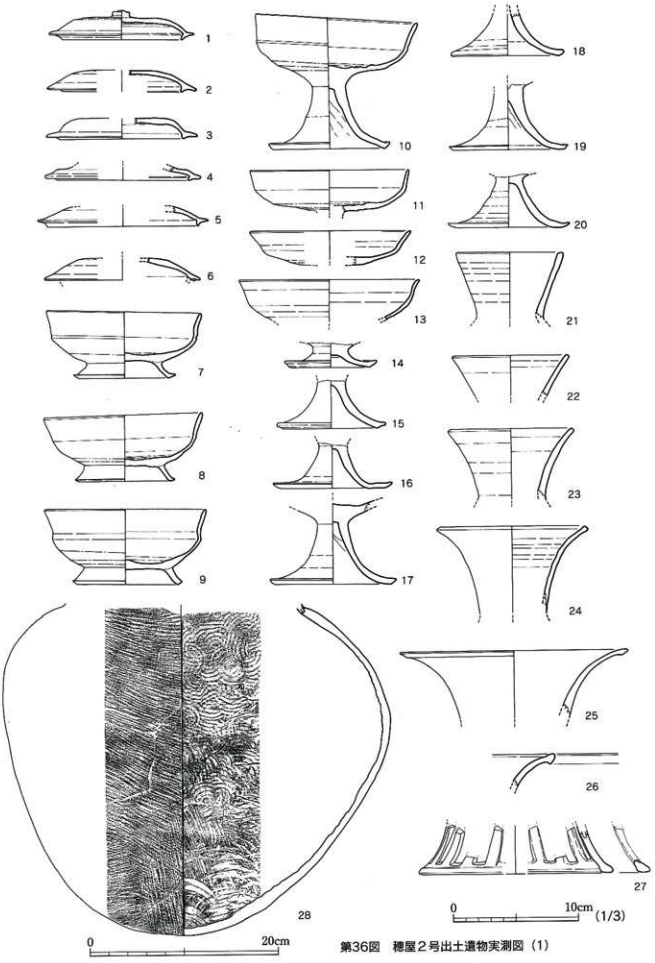


※図中の番号は実測番号と対応する。

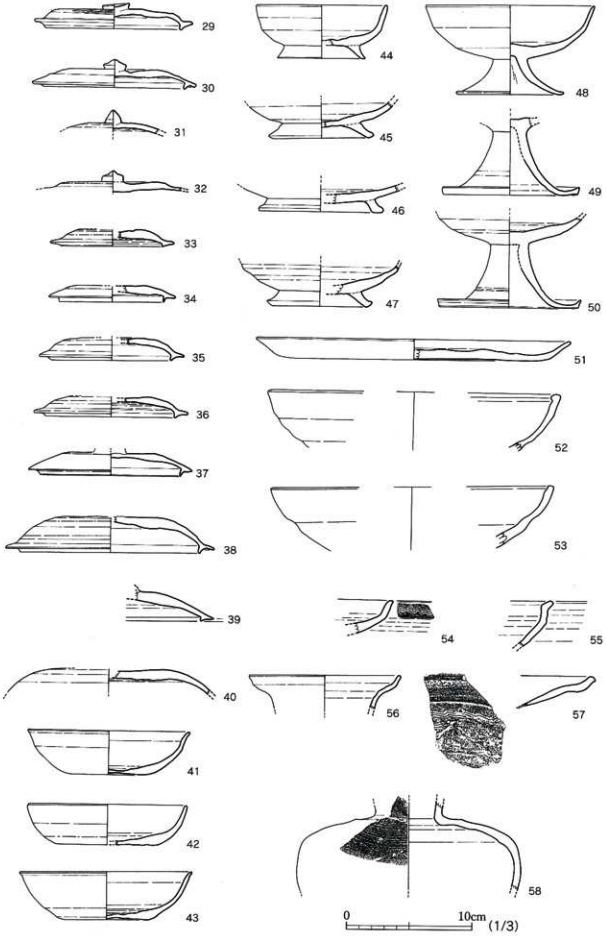
第34図　穂屋2号窯跡実測図（1）



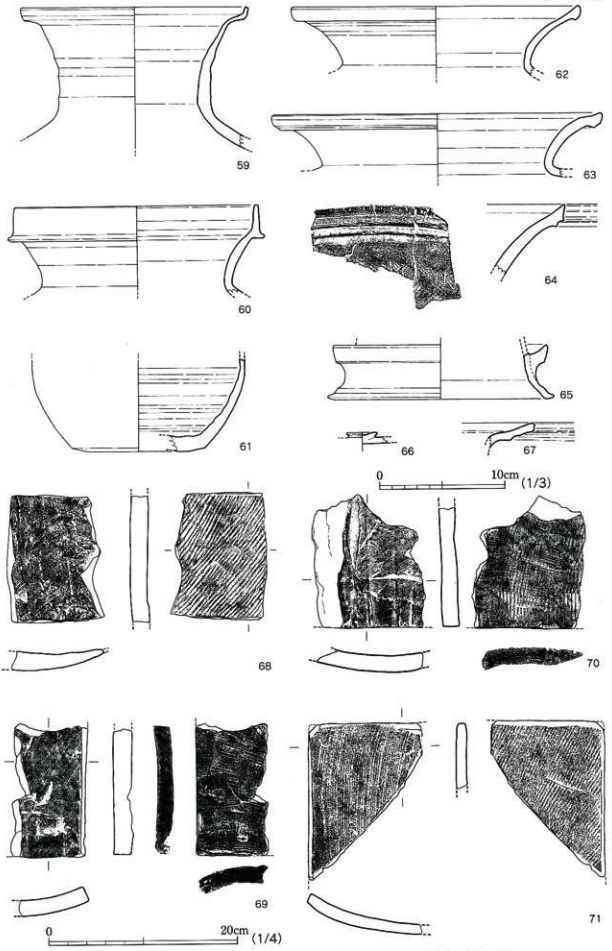
第35図　穂屋２号窯跡実測図（2）



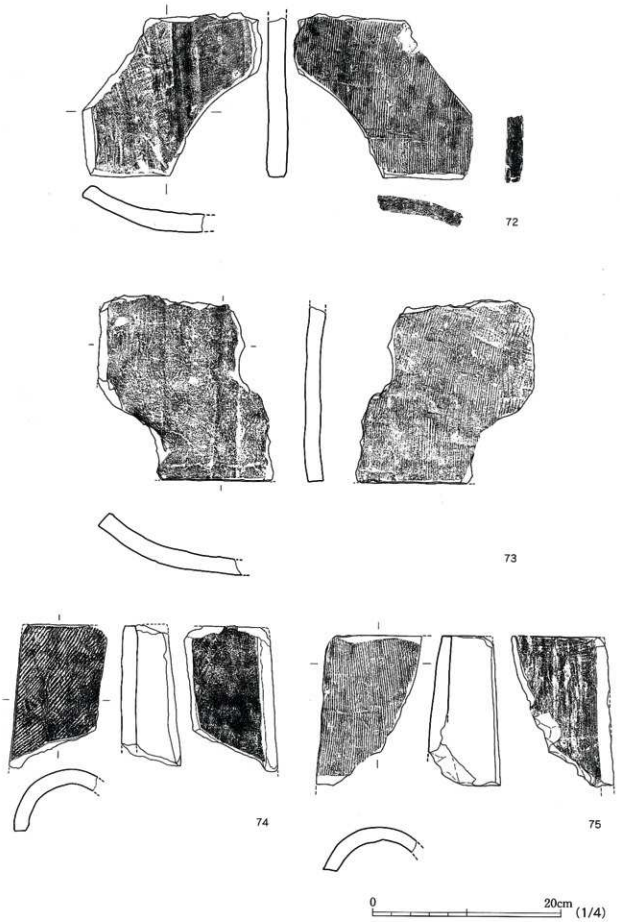
第36図　穂屋２号出土遺物実測図（1）



第37図　穂屋２号窯跡出土遺物実測図（2）



第38図　穂屋２号竪跡出土遺物実測図（3）



第39図　穂屋２号窯跡出土遺物実測図（4）